

彭劍南の戯曲『影梅庵』『香畹楼』とその時代

大木 康

はじめに

明末清初の文人冒襄（一六一一～一六九三）は、もと南京秦淮、蘇州半塘の妓女であり、後にその側室となった董小宛（一六二三～一六五二）が若くして亡くなった折、彼女の思い出を克明に綴った『影梅庵憶語』を書き残した。⁽¹⁾ この『影梅庵憶語』は、その後の清朝一代の文学にさまざまな影を投げかけることになった。曹雪芹（一七一五頃～一七六三頃）の小説『紅樓夢』も、その影響下で書かれたと考えられ、『紅樓夢』の登場人物のモデルになったのが、ほかならぬ董小宛であったとするうわさがささやかれたことがあったほどである。⁽²⁾ また、清代に、沈復『浮生六記』など、亡くなった妻妾の思い出を綴った「憶語体」と称される一群の作品が著されたことも、『影梅庵憶語』が巻き起した波紋の一つである。

そして、清代嘉慶（一七九六～一八二〇）・道光（一八二一～一八五〇）年間の人、彭劍南は、『影梅庵憶語』の物

彭劍南の戯曲『影梅庵』『香畹楼』とその時代

語を戯曲化した『影梅庵』伝奇を作っており、その同じ彭劍南はまた、『影梅庵憶語』の後を承けた陳裴之作の、やはり若くして亡くなった側室の思い出を綴った憶語体の作品、『香腕楼憶語』を戯曲化した『香腕楼』伝奇も作っている。つまり、彭劍南という一作者によって、清代憶語体文学の二作品が戯曲化されているのである。

本稿では、彭劍南の『影梅庵』『香腕楼』両伝奇を中心として、その作品と周辺について考えてみることにしたい。後でも述べるように、彭劍南は、『香腕楼憶語』の作者陳裴之から直接の依頼を受けて『香腕楼』の戯曲を作ったようであるが、陳裴之は、袁枚亡き後、詩文の女弟子を持ったことで知られる陳文述の息子であり、陳裴之の妻である汪端は、『明三十家詩選』を編むなど、才媛として知られる人物。さらに彼らの交遊範囲には、『紅樓夢凶詠』の作者である改琦、袁枚の女弟子の一人である席佩蘭などもあった。彭劍南の『影梅庵』『香腕楼』を手がかりに、当時の一群の文人グループが浮かび上がってくる。彭劍南をめぐる文人グループの動向から、これら戯曲の生まれた時代相をも明らかにしたい。これが本稿の目指す目標の一つである。

一、『影梅庵』伝奇の内容

まずは『影梅庵』の物語を追って見ることにしよう。『影梅庵』は、楔子と上巻十四齣、下巻十四齣から成る伝奇作品である。

「楔子」は、伝奇にあってふつう「家門」あるいは「副末開場」と称され、副末が登場して劇全体の大意を述べる一段である。ここでは、『影梅庵』の劇全体の大意が次のように要約されている。

献忠賊 突破襄陽府 賊の張献忠が襄陽府を破り
憲副公 告帰水絵園 憲副公(冒襄の父、冒起宗)が退官して水絵園に隠遁する
董小宛 艶伝桃葉渡 董小宛の艶やかな物語は桃葉渡(南京秦淮の地名)に伝わり
冒辟疆 哀憶影梅庵 冒辟疆(冒襄)は、悲しく影梅庵を思い出す

そして「水調歌頭」の歌には、

玉清庵 玉清庵(の物語)

蒲東寺 蒲東寺(の物語)

曲江楼 曲江楼(の物語)

一例佳人才子 同いような才子佳人の

風月付清謳 風流の物語を清らかな歌声に寄せる

天下有情不少 天下に有情の人は少なくないが

吾輩鍾情特甚 われわれの情愛はとりわけ深い

といった句が見える。「玉清庵」は元雜劇の『玉清庵錯送鴛鴦被』、「蒲東寺」は蒲州の普救寺を舞台とする『西廂記』、曲江楼は「李亜仙詩酒曲江池」であるとすれば「李娃伝」の物語である。作者は『影梅庵』の物語を、これら才子佳

彭劍南の戯曲『影梅庵』『香畹楼』とその時代

人の物語の一つとして位置づけていることがわかる。

第一齣「性盟（犠牲を捧げて盟約を交わす）」

小生（冒襄）、生（張公亮）、末（陳則梁）

冒襄は科挙の試験のために南京に来て、秦淮の眉楼（眉楼は名妓顧媚の住まい）に滞在している。張公亮、陳則梁と盟約を交わすことになっており、彼らが来るのを待っている。張公亮、陳則梁が眉楼に到着する。

この場面の「二郎神」曲には、

紅牆内（内作犬吠声介）（生）叩銅鑼、有獬兕迎吠、共赴龍華天上会。（内作鸚哥声介）有客来了。（雜旦上開門介）（生）聽鸚哥喚客、双鬢繡戶潛開。

赤い堀の内側に（中から犬の吠え声）（生の歌）銅鑼を叩けば、出迎えて小犬が吠える。ともに赴こう天上の龍華会（龍華会は四月八日の灌仏会）へ。（中から鸚鵡の声）お客さんが来た。（雜旦が登場し、扉を開ける）（生）お客の来訪を告げ知らせる鸚鵡の声をきくと、侍女が装飾を施した扉をそっと開ける。

といった表現があるが、ここに見える妓楼の「銅鑼」「獬兕」「鸚哥」などは、明末清初南京秦淮の記録である余懷の『板橋雜記』上巻「雅遊」に見える「到門則銅鑼半啓、珠箔低垂、升階則獬兕吠客、鸚哥喚茶（門前まで行くと、銅鑼をつけた扉が少し開いており、玉すだれが低く垂れ下がっている。階段を上がると、小犬が吠えて来客をしらせ、

鸚鵡がお茶、お茶と叫ぶ」の文字を用いている。以下にも『板橋雜記』によった表現は散見される。

香を焚いて天地を拝し、義兄弟の盟約を交わした三人は、この後、天下の形勢を論ずる。各地で李自成をはじめとする流賊が猖獗をきわめているのに、朝廷の大臣には人物を得ず、亡国の危機が迫っているといい、具体的に、

自周延儒、温体仁得君以後、凡内外大僚、秉節鉞者、皆巧佞貪庸無恥之人也。

周延儒や温体仁が陛下の信任を得てからというもの、権力を握った内外の大臣たちはみなすべて口先ばかりで邪悪、がめつく凡庸な恥知らずばかりだ。

といったせりふが見える。さらには、冒襄たちにとっての敵対者であった阮大鍼の名が持ち出される。

目下尚存阮鬚子一流奸賊、既不明典刑、又不遠投魍魅、只怕根株未断、死灰復燃、如之奈何。

いまだに阮のひげ野郎（阮大鍼）のような奸賊が残っているのは、国の刑罰が正しく行われていないばかりでなく、また魍魅魍魎に身を寄せるのと同じことだ。根っこが断たれていないと、消えた灰がまた燃え出すのではと心配だ。どうしたらよからう。

『影梅庵』は、才子佳人の恋物語であるが、その横糸になっているのが、当時の政治社会状況である。

『影梅庵』伝奇では、冒襄は張公亮（張明弼）、陳則梁と盟約を交わすことになっているが、実際にはさらに呂兆龍、

劉履丁を加えた五人で盟約を交わしている。眉楼での「五人盟」のことは、冒襄が師友たちから贈られた詩文を集めた『同人集』巻五に収められた「五子同盟詩」のほか、余懷『板橋雜記』巻下などにも見えている。

第二齣「盒子会（盒子会）」

老旦（陳氏、董小宛の母）、小旦（董小宛）、旦（柳如是）、貼（顧眉）、雜旦（李湘貞）、丑（顧小喜）

陳氏登場。娘の董小宛を紹介し、これから妓女たちの仲間（手帕姉妹）が参集して、盒子会が開かれることを告げる。盒子会とは、重箱に入れた料理を持ち寄って料理の味を競いあうパーティーである。今日の盒子会では、董小宛が幹事役をとめる番になっている。

盒子会については、『板橋雜記』巻下に叙述があり、『桃花扇』第五齣「訪翠」にもその場面がある。

董小宛登場。盒子会のために準備した食べ物について紹介する。このたびの会のためには、「幾色蜜漬の果品、一甌釀飴的花露（幾種類かの蜜につけた果物、一かめの醸して飴ようになった花露）」を準備したという。これらの食品については、『影梅庵憶語』の中に、董小宛が実際に作ったとの記事が見える。

柳如是、顧眉、李湘貞、顧小喜らがうちそろって董小宛のもとにやってくる。会が始まり、みなで持ち寄った料理のふたを開け、それぞれ賞味しあう。結果として、董小宛の料理が、「頭名状元」とされる。

酒が運ばれ、音楽が奏でられて、宴会がはじまる。音楽については、「張卯官的笛、管五管的管子、呉章甫的弦索」とある。これらの人々は、やはり『板橋雜記』巻下で、秦淮のすぐれた藝人を列挙したところに挙げられている名である。

宴席の間に、侍女と顧眉が、冒裏についてのうわさをする。その後で、柳如是、顧小喜が歌を歌う。董小宛にも、ということになるが、彼女は身体の具合が悪いといって、歌わない。灯りもとり、顧眉が先に帰っていく。

第三齣「撫寇（賊を按撫する）」

浄（張献忠）、末（陳洪範）

張献忠登場。各地を荒らし回って来たが、いま鄖西（湖北）で官軍に包囲されている。

総兵官陳洪範登場。そのもとに張献忠が投降してくる。張献忠は、かつて陳に命を助けられたことを述べ、再び陳のために働きたいという。陳はそれを認める。

第四齣「失馭（制御不能）」

小生（左良玉）、末（陳洪範）、外（王瑞旆）、生（林銘球）、副浄（熊文燦）、浄（張献忠）

張献忠は投降したとはいっても、いつまた叛旗をひるがえすかわからない。左良玉、陳洪範、王瑞旆、林銘球らは相談して、張献忠を斬るべしということに決する。

そこへ、督師の熊文燦がやってきて軍議が行われる。左良玉らは張献忠を斬ることを主張するが、熊は張献忠を殺すべきではないと主張する。左良玉は怒って退出する。

張献忠が呼び出される。熊は献忠に酒や食料、銀を与えて釈放してやる。張献忠笑いながら退場。

この一段の史実については、計六奇『明季北略』卷十四 崇禎十一年「張猷忠請降」、また同卷十五 崇禎十二年「張猷忠復叛」の条に、記載がある。

第五齣「半塘（半塘）」

小旦（董小宛）、小生（冒襄）、老旦（陳氏）

春の終わりを歎き、結婚できないことを歎いて、董小宛が一人酒を汲み、酔っぱらう。はじめの白（せりふ）に次のようにある。

前日我母親説、有個姓冒的公子來訪、已是數遭、未曾一晤。奴想杜蘭香降於張碩、吳彩鸞嫁得文簫、彼仙家尚有良緣、奈人世竟無佳偶。

以前わたしの母が語った話によれば、冒という姓の貴公子がもう何度もたずねて来りましたが、まだ一度もわたしに会っていないとのことでした。思うに杜蘭香も張碩のところ以降臨しましたし、吳彩鸞も文簫に嫁ぐことができました。あの仙人たちにさえ良縁があるというのに、この人の世でよきつれあいが無いのを、いったいどうしたらよいのでしょうか。

冒襄登場。方密之、張公亮といっしょに何度か董姫をたずねたものの、会うことができなかった。今日も彼らと約束したが、どこに行ったかわからず、そこで一人董姫をたずねてきたという。老旦の陳氏が対応し、酒に酔った董小

宛を支えながら登場。二人は黙つてみつめあう。陳氏が二人にそれぞれ呼びかけても、夢中になっていて応答がない。こうした様子が、陳氏の歌によつて表現される。

方密之たちが冒襄を呼んでいると書童が告げに来て、冒襄はいとまを告げる。董小宛は立ち去つて行く冒襄を目で追いながら、次のようにいう。

異人、異人。孩児静観此人、得其神趣、此殆孩児委心塌地処也。

すばらしいお方、すばらしいお方。わたしが見ましたところ、このお方は人間離れた雰囲気をお持ちです。これはわたしが心を委ね、身を落ち着けるところのようです。

この表現は、張明弼の「冒姫董小宛伝」に見えるいい方である。なお、『影梅庵』伝奇のト書きにも、「曲欄を設ける」としているが、『影梅庵憶語』でも、「冒姫董小宛伝」でも、冒襄と董小宛がはじめて会った場面には「曲欄」があったとある。

第六齣「献叛（張献忠叛旗をひるがえす）」

淨（張献忠）、外（王明）、末（宋宮）、副末（張其在）、副淨（郭尚義）、丑（杜興文）、老旦（汪万象）

張献忠は、崇禎十二年の五月に至り、再び叛旗をひるがえした。左良玉の軍に包囲され、妻を襄陽の獄に連れ去られていたが、勢力を盛り返し、襄陽に迫っていた。ここで外以下が扮するのは、張献忠の部将たちである。張献忠が、

部將たちに、

頭目們、快些把擄掠的男男女女老少一古腦子都收拾干淨了。

頭目たち、とつとと捕虜にした老若男女をすっかりかたづけてしまえ。

と命令を下すと、舞台の奥から人々の叫び声があがるといった演出があり、続けて、部將たちが殺戮した手足のない人の身体を献上する、など残酷な場面がある。

そして、まもなく襄陽を攻撃するむねの命令を下す。

張献忠が各地で残酷な殺戮を行ったことについては、彭孫貽の『平寇志』、彭遵泗の『蜀碧』など多くの資料があるが、この劇はそうした資料の記述をたどっている。^⑤

第七齣「省覲（親を見舞う）」

旦（蘇氏、冒襄の妻）、外（冒起宗、冒襄の父）、老旦（冒襄の母）、小生（冒襄）

冒襄の妻の蘇氏は、その舅の任地である湖北に、舅、姑とともに来て、孝養を尽くしている。冒襄は南京での科擧の試験のため、蘇州に滞在していたが、やがて冒襄も湖北に到着し、家族が一堂に会する。

そこに公文が到着し、張献忠が叛旗をひるがえし、こちらに向かっていることが告げられる。冒起宗はそこで、冒襄に母と妻を連れて郷里の如臯に帰らせ、自分は一命を賭して賊と戦うことを告げる。

第九齣「陷藩（藩の陥落）」

浄（張献忠）、丑（劉興秀、張献忠の部下）、雜（王府の兵）、小生（襄王）

張献忠登場。真夜中の砲声を合図に、内応して城門を開ける手はずになっていて、軍が城内に殺到する。

張献忠は、兵を率いて襄王府に至る。襄王府では、襄王を守っていた宮女が殺され、襄王は、テーブルの下に隠れている。次のような襄王の歌がある（水底魚児）。

鳳子龍孫、為奴困未伸。啊哟、太祖皇帝呀、（乱拜介）求你在天之靈快来救你孫兒則個。啊哟、罷了罷了。高皇列聖、号呼竟不聞、号呼竟不聞。

鳳凰や龍の子孫であるわたしが、奴隷めのために困難に陥って救われない。ああ、太祖皇帝よ、（やたらに拝するしぐさ）あなたの在天の靈よ、早く来てこの子孫を救ってください。ああ、だめだだめだ。高皇列聖たちを、どんなに呼んだって聞こえない。どんなに呼んだって聞こえない。

明王朝創業の君主である太祖が思い起こされる。襄王は乱兵に発見され、張献忠の前に引き出される。王は命ごいをするが、四川を守る楊嗣昌を下すためにその首がいるのだとして、王の首をはねる。

第十齣「黄山（黄山）」

老旦（尼）、小旦（董小宛）

董小宛は黄山におり、尼の案内で、黄山の名勝をめぐる。その末尾、尼のいないところで、次のようなせりふと歌を歌って、この齣は結ばれる。

我董青蓮、自西湖遠遊到此、將及三年、竟不知那冒公子的下落。不免同母親回去、仍住半塘、等他來時、若能永訂終身之約便好。

〔収尾〕相逢未嫁意偏諧、只盼不見乘槎仙客、冒郎吓、敢是你到青溪橋畔問楊枝、怎知俺向黄山袖裏携雲海。

わたくし董青蓮は、西湖からはるばるここまでやってきて、三年になろうとしています。あの冒さまがどうしておられるか、わかりません。わたくしは母親といっしょに帰らなければなりません。そして、前のように半塘で暮らし、あの方がやって来られた時に、末永い一生の約束ができればいいのだけれど。

〔収尾〕あの方にお目にかかって、まだ嫁入ったわけではないけれど、二人の気持ちはしっくり合っています。ただ、いかだに乗った仙客（冒襄を指す）は待ち望んでもなかなか会えません。冒さま、きつとあなたは青溪橋（南京秦淮にある橋）のほとりに楊枝（「楊枝」の歌が得意であった白居易の愛妾樊素。他の女性）をたずねて行かれ、わたしが黄山にいて袖の中に雲海（世界）を携えていることをご存じないのですね。

董小宛が黄山に行ったことは、『影梅庵憶語』に見えており、冒襄の『同人集』卷十一、冒襄「和書雲先生己巳夏寓桃葉渡口即事感懷韻」の跋に「董姬十三離秦淮、居半塘六年、從牧齋先生遊黄山、留新安三年、年十九歸余（董姬は十三歳の時に秦淮を離れ、それから蘇州の半塘に六年おり、牧齋先生（錢謙益）に従って黄山に遊び、新安に三年

間留まり、十九歳の時わたしの側室となった」とある。葛万里編『清錢牧齋先生謙益年譜』によれば、錢謙益は、崇禎十四年（一六四一）の三月に黄山に遊んだことになっている。

第十一齣「失陷（陥落）」

小生（把総）、外（冒起宗）

督師の熊文燦が冒起宗を左良玉の軍の監軍として赴任させる命令書を発し、把総（官軍の走り使い）がそれを届けようとする。熊文燦は冒起宗と仲が悪かったために、冒起宗を張猷忠に対する最前線の死地に追いやろうとするつもりである。

冒起宗のもとに、把総が公文を届けてくる。公文を見た冒起宗は、これは、乱賊の手で死ぬというより、権臣のために殺されるようなものだ、と歎く。そうしななかで、国のために命を捨てることを誓い、息子の冒襄にあて、覚悟のほどを述べ、わが骨を取めよ、との手紙をしたためる。

〔越恁好〕好収吾骨、好収吾骨、嘱付汝無多。出山悔早、儘宦海受風波、急流逢颶、真刹那如何振舵。孩兒呀、国歩艱難如此、大臣猶思報復、我今調往左鎮監軍、此行性命休矣。平安報、此刻尚黃堂坐、危亡逼、頃刻已黃沙
臥。

〔越恁好〕わたしの骨を拾ってくれ、わたしの骨を拾ってくれ（「好収吾骨」は、韓愈「左遷至藍關示侄孫湘」詩に「好収吾骨瘴江辺」とある）。おまえに頼みたいのはそれだけだ。出仕するのが早すぎたのが悔まれる。役

人の世界で波風を受け、急な流れで台風に出逢ってしまった。こんな時、いったいどうやって舵をあやつったらよいというのか。息子よ、国の命運がこれほど困難な状況に置かれているのに、大臣たちは、そんな時にさえないお報復を考え、わたしは今、左良玉の陣に監軍として行かされることになってしまった。ここで行ったら、命も終わりだ。いまはまだ太守の役所に座っていると告げ知らせることもできるが、危機は迫っていて、まもなく黄沙に臥すことになるだろう。

第十二齣「憤疏（怒りの上書）」

小生（冒襄）、末（張秋）

母親たちを連れて故郷に帰った冒襄のもとに、冒家の使用人の張秋が父親の手紙を届けてくる。冒襄はそれを見て涙を流し、権臣が国をあやまつていることを憤り、父親を救うため、血書による上奏文をしたためる。

上奏文（その内容は歌によって示される）では、熊文燦が張獻忠を活きのびさせてしまったことからはじめ、さらに熊文燦が冒起宗をおとし入れるため、わざと最前線に送ったことを述べ、父親を転任させてほしいと訴える。

冒襄は実際父親のために上書をし、父親の転任がかなったことから、孝子であると称されたことは、『影梅庵憶語』やその伝などにも見えている。この一齣は、そうした事実にもとづいている。

第十三齣「病憶（病んで恋人を思う）」

貼（董小宛の侍女）、小旦（董小宛）

黄山から蘇州の半塘に戻った後、母親が亡くなり、病気になった董小宛は、ひたすら冒公子に嫁したいと思っている。冒公子を思う歌が続く。

侍女が薬を持ってくる。侍女が、あなたは、男女のことをいやがっていたのですから、公子のことを忘れてしまえば、病気はすぐによくなるでしょうというのに、どうしてあきらめられましようといい、「錦上花」の歌には、

一見了冒公子呵、恰便似相思鳥比目鱗、投情網迷愛津、敢則被赤繩繫緊繃鞵跟並剪快難分。

冒公子を一目見てからというものの、まるで相思鳥、比目魚のよう、情の網にかかり、愛の渡し場がわからなくなったみたい。赤い糸で靴のかかとをしっかり結びつけられ、いくら切ろうとしても切れません。

とある。侍女がさらに、あなたが思っているかどうかはわかりません。また、たとえば思っていたところで、会えるものかどうか、というのに対し、続く「錦中拍」の歌で、

咳、我這胡思乱想、敢是不中用的。董青蓮、董青蓮、你的命好苦也、是前生孽因、今生病根、逼迫的輕軀委頓、迤邐的緘腰痛呻。(泣介) 好事多磨、名花易隕、到底是玉成煙夜臺近。

ああ、わたしがどれだけ思っても、何の役にも立ちほしくない。董青蓮、董青蓮、あなたの運命はとても厳しいのね。それは前世の悪い因縁が今生の病根になっているでしょう。不運に迫られて、わたしのこの小さなからだは病みつかれ、あの方を思うたびに、わたしのこの細い腰が痛みます。(泣くしくさ) 好事は魔多く、名花は

落ちやすい。ついには玉は煙と消え、あの世も遠くない。

という。それからまた、わたしはいつでも冒公子に会っている、という。頭がおかしくなったのでは、という侍女に、いつも夢の中で会っているのだと、続く歌で述べる。

董小宛の口説きともいえるこの一齣は、『影梅庵』伝奇のハイライトの一つともいえる場面であろう。『影梅庵憶語』では、最初一目見た後、董小宛がどうしていたかについては描かれていなかったのだが、ここでは董小宛が冒襄に一目惚れした物語になっている。

第十四齣「散賑（救援の物資をふるまう）」

小生（冒襄）、雑（饑民）

上書のために行った都より帰郷してからのこと。この年、崇禎十三年（一六四〇）、江南地方は大旱魃に見舞われた。冒襄が私財をなげうって救荒の活動を行う場面。冒襄の活動としてよく知られる。後でも触れるように、彭劍南は、『影梅庵』の自序で、作品がもとづいた資料をいくつか挙げている。そこに挙げられた韓莢による冒襄の伝「潜孝先生冒徵君襄墓誌銘」（『有懷堂文藁』卷十六、また『碑伝集』卷一二六逸民下之下にも収める）にも救荒のことは見え、ほかに范質公（范景文）の「壬午救荒記」も挙げられている。これは冒襄『同人集』卷一に収める「冒辟疆救荒記序」のことであろう。さらに冒襄自身の文集『樸巢文選』卷二にも「救荒記」を収める。

まずは餓えた民があらわれ、冒襄は五升の米をめくむ。次いで、ぼろぼろな着物を着たものがあらわれ、着物をめ

ぐむ。次に、病気のものに、薬の代としてお金をめぐむ。次いで、肉親を失ったが埋葬できないというものに、棺桶とお金をめぐむ。次いで、老人がやってくると、養老堂に送ってやる。次に、みよりのない子供が来ると、育嬰堂に送ってやる。生活が苦しく、妻を買入れしたというものがあらわれ、五十両の銀を与え、買い戻させる。最後に乞食があらわれ、食べ物をめぐんでやる。最後の乞食がしゃべる言葉は呉語である。

いずれも、冒裏の施しを受け、よろこんで去って行く。

巻下

第十五齣「得調（転任の報せ）」

丑（司礼太監）、外（冒起宗）

司礼太監が、冒起宗転任の詔勅を持って、襄陽を訪れる。太監が、冒起宗転任の詔勅を奉読する。冒起宗は、ここで退任を申し出る上奏文の伝奏を依頼するが、太監はその伝奏を断る。

太監が退場した後、冒起宗は息子の冒裏をほめ、転任をしらせる手紙をしたためる。

父の転任については、『冒巢民先生年譜』崇禎十五年に「憲副公調宝慶、尋告帰（憲副公は宝慶に転任になり、つづいて辞職して郷里に帰った）」とある。同条に引く「嵩少公墓誌」（陳維崧）には、「公子念父以劳臣践危疆、戒家人不令公知、而陰泣血上書。政府同郷之孫黄門、顔銓部、成侍御又翕然咸頌公子才、而嘉其孝、力為之争。乃得再移宝慶。而公浩然乞骸骨帰。帰未兩月、襄陽復破（公子父の劳臣を以てして危疆を踐むを念ひ、家人を戒めて公をして知らしめず、陰かに泣血上書す。政府同郷の孫黄門、顔銓部、成侍御又た翕然として咸な公子の才を頌し、而して

其の孝を嘉し、力めて之が為に争ふ。乃ち再び宝慶に移るを得たり。而して公浩然として骸骨を乞ひて帰る。帰りて未だ両月ならざるに、襄陽復た破る」とある。宝慶は湖南にある（現在の邵陽）。

第十六齣「桐橋（桐橋）」

雑（船頭）、小生（冒襄）

冒襄が蘇州で船に乗り、董小宛を思いながら半塘の桐橋を通りかかる。水に臨んで竹垣を結ったあの雅やかな家は、どなたの住まいかと冒襄がたずねたのに対し、船頭は、これは秦淮から移ってきた董小宛の家であるといい、彼女は母親が亡くなった後、病気になって、客を謝絶していることを告げる。

『影梅庵憶語』では、冒襄が蘇州の名妓陳円円となじみ、陳円円から自分を落籍してほしいといわれる一段がある。ところが、陳円円はむりやり北京の宮廷に連れ去られてしまった。かくして、鬱々として虎丘の方に船をうかべていると、ある橋を過ぎたところで、董小宛の住まいを見つけた、ということになっている。『影梅庵』伝奇では、陳円円のことにはまったく触れていない。

第十七齣「心薬（心の薬）」

小旦（董小宛）、小生（冒襄）、貼（董小宛の侍女）

病の床に伏す小宛のところに、冒襄がたずねて来る。

〔北喜遷鶯〕不信俺看朱成碧、眼昏昏恹恹迷離、驚也波疑、索為君彊掙扎起。(欲起介) (小生) 快休如此。(小旦) 我一見郎君、便似著了迷、怎撇下三年別、剩今宵燈前眼底、還畢竟是夢耶非。

(小生) 清清醒醒的、怎說是夢。(小旦泣介)

〔北喜遷鶯〕わたしは朱を碧と見誤っているのでしょうか。目はくらんで、頭もぼんやり、びっくりし、かつは疑い、あなたのために強いて起き上がりましょう。(起き上がるしぐさ) (小生) どうぞそのままです。

(小旦) わたしはあなたを一目見たその時から、恋の思いに迷っているようです。どうして三年間もの間捨て置かれて離ればなれでいられたのでしょうか。そして今宵、灯火の前、眼にうつるあなたは、さて、夢ではないのでしょうか。

(小生) はっきりした現実ですよ。どうして夢でなどありません。(小旦涙を流ししぐさ)

以下、多くは董小宛が冒襄と再会できた喜びを歌う。しまいには、

(披衣起介) 吾疾癒矣。妾有懷已久。天下物未有孤生而無偶者、氣有潛感、數有冥會。今妾身不見公子則神廢、一見公子則神清。數十日來、勺粒不沾、医薬罔效。郎君夜半一至、妾遂霍然。君既有當於妾、妾豈無當於君。願以此刻委終身於君。君万勿辭。

(着物をおおって起き上がるしぐさ) わたしの病氣は治りました。わたしには長いこと心の中で思っていたことがあります。天下の物には、ひとりぼっちであって、つれあいが無いものはありません。ひそかに気が感じあっ

たのでしようか。しばしば夢でお目にかかりました。わたしはあなたにお目にかかれなければ精神もずたずたですが、一日あなたにお目にかかって気持ちがつきりしました。数十日このかた、ほんの少しの飲み物も食べ物ものどを通らず、薬も効き目がありませんでした。ところが、あなたが真夜中にやってこられるや、わたしは病気がけろりと治りました。あなたがわたしを思ってくださいるからには、わたしがどうしてあなたを思わないことがありましよう。願わくはいまこの時からあなたに一生お仕えしたいと思います。どうぞ決して断らないでください。

と、自分で側室として娶ってくれるよう頼むのである。

冒襄は、終身の大事をいきなり切り出されても、と躊躇しながら、明日また来るといって、船に帰っていく。冒襄が董小宛と再会する場面は、いうまでもなく『影梅庵憶語』にも見える。

第十八齣「競渡（ボートレース）」

浄（船頭）、小生（冒襄）、小旦（董小宛）

京口（鎮江）で、五月五日の龍船のレースが行われている。そこへ冒襄と西洋布の着物を着た董小宛が登場。みんな二人を見て、なんと美しいのかと話し出す。

舞台には金山の作り物が設けてあり、二人はその上に立つ。多くの人々が、二人をほめる。

浄（船頭）が船をこいでやってくる。船頭は、冒襄が湖北から帰った時の船頭であって、鷺酒を与えてねぎらう。

冒襄と董小宛の二人は山を下りて船に戻り、そこで桜桃を食べる。

これらいずれも『影梅庵憶語』に見える場面である。

第十九齣「酔月（月見の宴会）」

外（方密之）、末（陳則梁）、生（侯方域）、貼（顧眉）、雜旦（李湘貞）、小生（冒襄）、小旦（董小宛）

董小宛は、科挙の試験を受けるため南京に滞在中の冒襄に会いに、蘇州から船を雇ってやってこようとした。その途中で船が賊におそわれる危機に際会した。そうした董小宛をねぎらうため、南京秦淮の桃葉渡で宴席が設けられる。方密之、陳則梁、侯方域、冒襄らが参加し、董小宛のほか、妓女の顧眉、李湘貞も加わる。

酒を酌み交わしつつ、董小宛は、「尹令」の歌で、みずからの運命のつたなさ、いまだに冒襄といっしょになれない恨みを述べる。

宴席で、芝居が演じられる。阮大鍼作の『燕子箋』であり、その離合悲歡の物語に、董小宛、顧眉、方密之がそれぞれに思いを述べる。

冒襄、董小宛の二人がいっしょになれることを祈って宴席が終わりを告げる。

『影梅庵憶語』にも見える場面。冒襄は、阮大鍼の『燕子箋』とその劇団をほめつつ、阮大鍼本人を罵ったことから、明王朝滅亡後、南京にできた臨時政府で権力を握った阮大鍼からあやうく弾圧されるかかる事件があった。⁽⁴⁾

第二十齣「帰田（父の隠棲）」

外（冒起宗）

官職を離れた冒起宗が、陶淵明の「帰去来辞」などを引用しつつ、郷里に帰って隠棲する喜びを歌う。

第二十一「別玉（別れ）」

小生（冒襄）、小旦（董小宛）

冒襄が郷里に帰るために、南京で董小宛と別れる一段。冒襄と別れなければならない董小宛の悲しみの歌。もし、冒襄と添い遂げることができなかつたならば、尼になるといふ。冒襄は、友人の蘇州刺史李巫臣に董小宛の身柄を預けていくと告げる。

これからは夢の中で会うしかないという董小宛の最後の歌で幕を閉じる。

第二十二齣「憐香（香を憐れむ）」

副浄（郡王の王孫、嫖客）、丑（国公の公子、嫖客）浄（李巫臣）、丑（教坊司）、外（錢謙益）

廓の客たちが、董小宛が廓から姿を消し、李巫臣にかくまわれていることを憤っている。李巫臣は、蘇州刺史の役所に董小宛をかくまったが、廓の者たちや豪族たちに包囲され、進退きわまつている。彼女を引き渡せば騒ぎは収まるが、一方で彼女が気の毒でもあり、冒襄との約束にそむくことになる。そこで、錢謙益に手紙を書いて、救いを求めることにする。

廓を司る教坊司が、董小宛の騒ぎを聞き、教坊司の責任にされることをおそれ、また李自成や張献忠らによって世の中が乱れていることを思い、官帽を脱いで、逃げ去っていく。

錢謙益は、李巫臣の手紙を得て、柳如是とともに力を貸し、董小宛を落籍させ、その借金のかたをつけてやる。そして虎丘で、彼女の送別の宴を張るよう、柳如是にいいつける。

董小宛の落籍をめぐる、『影梅庵憶語』では、最初、劉刺史がひと肌脱ごうといったが、うまくいかずに姿をくらましてしまい、その後で錢謙益が、南京の関係者に頼んで、落籍に成功したことになっている。豪族たちに囲まれたことは、『影梅庵憶語』では、陳円円が北京に連れていかれる場面の描写に見える。ここではそれを用いたのであろう。

第二十三齣「集饞（送別の宴席）」

旦（柳如是）、小旦（董小宛）、貼（顧眉）、雜旦（李湘貞）、丑（顧小喜）

柳如是が、董小宛を如臯に送る饞別の宴席を準備する。

宴会が始まり、董小宛は、落籍がかない、如臯の冒家に行ける喜びを語る。見送るみな、それぞれに思いを語る。かつての盒子会を思い出し、もう会えなくなることを悲しむが、いずれまた会える機会はあるだろうといって散会する。

董小宛が蘇州を離れ、如臯の冒家に向かうに際し、錢謙益が蘇州の虎丘で送別の宴席を張ったことは、『影梅庵憶語』にも見える。

第二十四齣「影梅（影梅）」

小生（冒襄）、貼（侍女）

冒襄が、冒家に来てからの董小宛の様子を述べる。暇な時には自分といっしょに書物や絵画の中に座り、瑟を奏で、名香を賞し、金石などを賞翫し、古今の人物を品評する。そして四唐詩を集める作業（冒襄は全唐詩集を編纂する志を抱き、その作業を進めていた）では、ひがな一日、本を書き写す手伝いをしてくれる。董小宛は、古今の女子についての書物である『奩艶』を編集した。詩では、『楚辭』、杜甫、李義山、三家宮詞を好んだ。さらに絵も好んだことをいう。これらはいずれも『影梅庵憶語』に見えることから。

侍女が香炉を持って登場し、これから董小宛が沈香を焚くのだという。香は彼女でなければ、上手に焚けないことをいう。これも『影梅庵憶語』に見える。さらに月を愛し、お茶を好んだ。

『影梅庵憶語』の後半部分は、董小宛の趣味についての造詣の深さに関する記述が大半を占めるが、それらについては、この一齣で簡単に説明されている。この齣に董小宛自身は登場しない。

第二十五齣「避難（難を避ける）」

末（冒家の家令）、小生（冒襄）、小旦（董小宛）、外（冒起宗）、老旦（冒襄の母）

冒襄はかつて阮大鍼を罵ったことがあったが、その阮大鍼が、明王朝滅亡後、南京にできた臨時政府で力を持ったために、復社成員が弾圧され、冒襄もあぶないところを助かった。そのため家族をひきつれ、塩官の陳則梁をたよって避難することになったと述べる。

避難の途中、悲惨な難民にあつたり、乱兵に出くわしたり、苦勞をするが、そうした困難の中で、董小宛が犠牲的な気働きを見せる。

『影梅庵憶語』にもある一段。実際は、清軍が南下してきたのを避けて塩官に行ったのであるが、ここでは阮大鍼による弾圧を避けたことにしている。

第二十六齣「平寇（賊を平定する）」

生（肅親王）、旦、外、末、副淨（肅親王麾下の部将）、丑（劉進忠）、淨（張猷忠）

清王朝の肅親王が、張猷忠をはじめとする流寇を平定するために兵を挙げていることをいう。張猷忠の部下の劉進忠がいけどりにされ、張猷忠の居場所を告げる。しばし戦いの場面があつて、張猷忠が討たれる。最後は、全員の合唱により、「成就我万万年定鼎 皇清大一統」という歌が歌われる。

『影梅庵憶語』では、塩官に避難した冒家の人々が、「大兵（清兵）」によって恐ろしい目にあうところなのだが、ここは、清朝を立てる形で書き換えてある。

第二十七齣「椿寿（長寿をことほぐ）」

小生（冒襄）、丑、末（家丁）、外（冒起宗）、老旦（冒襄の母）ほか

冒襄が登場し、逆賊が平らげられ、清の天下になったが、自分は新しい王朝には仕官しないことをいう。父親の誕生日の会が開かれる。錢謙益、龔鼎孳、また侯方域、方密之、陳貞慧、張公亮、陳則梁らから贈り物が届けられる。

冒襄の父親と母親が登場する。冒襄の二人の息子、冒起宗の側室たちも登場して、一同うちそろって、冒起宗夫妻の長寿をことほぐ。

第二十八齣「菊仙（菊仙）」

十二月花神、花童、貼（侍女）、小旦（董小宛）、小生（冒襄）

十二月花神、花童が菊を持って登場。重陽節である。侍女によって、董小宛が、塩官への避難から帰ってから、病氣になったことが告げられる。

侍女、小宛をかかえて登場。菊の花を見ながら、病氣になってやせ衰えていく悲しみを歌う。

冒襄登場。

（小生）蓮娘位置、菊影極其參横妙麗、你看人在菊中、菊与人俱在影中、真不負為黃花知己。（小旦）菊之意態
尽矣。其如人瘦何。

（小生）蓮娘のいる位置は、菊の花がすばらしく映える。ごらんなさい、人が菊の中になると、菊と人がどちらも影の中にいて、黄花の知己というのにそむかない。（小旦）菊の意態はこれに尽きていますが、人が痩せているのをどうしたらいいでしょう。

病身の董小宛が菊を見、菊の中に座る様子は『影梅庵憶語』に見えており、ここはそれをそのまま用いている。

董小宛が菊の中に横たわって眠ると、天上から音楽が聞こえ、仙童四人、舞雲仙女四名が菊を持ち、天上の西王母の命を承けて迎えに来たといひ、董小宛は瑤池花史として仙界に昇ってゆく。(劇終)

以上が『影梅庵』の梗概である。『影梅庵』の戯曲としての構成を見ると、冒襄と董小宛とが最初に会おう第五齣の「半塘」を別にすれば、再会がなかった第十七齣の「心葉」以降に、冒襄と董小宛とが同時にあらわれる齣が多い。それまでの第十六齣までにおいては、第一齣「牲盟」、第七齣「省親」、第十二齣「憤疏」、第十四齣「散賑」の四齣が冒襄の登場する齣、第二齣「盒会」、第十齣「黄山」、第十三齣「病憶」、第十六齣「桐橋」の四齣が董小宛の登場する齣となっている。そこに張献忠がらみの齣(第四齣、第六齣、第九齣、第十一齣など)が加わる。中心的人物が交互に登場する場面の展開は、伝奇の常套とはいえ、変化に富んでいるといえよう。

『影梅庵』は、「楔子」を加えて全二十九齣ある。そのうち六齣分が、張献忠がらみの物語である。冒襄と董小宛の物語が縦糸であるとする、張献忠に関する物語は横糸ということになるが、横糸の占める割合は比較的高いと見るべきであろう。

才子と薄命の佳人の物語、そして政治社会情勢。『影梅庵』伝奇の作者の関心は、恋と政治の二点に帰することができる。この点は、明末清初南京秦淮を舞台にした孔尚任の『桃花扇』などとも共通している。彭劍南が『桃花扇』から学んでいるものは少なくない。

清代後期、嘉慶・道光年間に、明末清初の歴史が思い起こされ、こうした戯曲が作られた背景には、その後さらに明らか傾向となる、明末清初の時代への一種ノスタルジーの感情があったにちがいない。明末清初を舞台にした戯

曲についてみても、陳円円を主人公とする丁靖伝の『滄桑艶』（光緒三十四年 一九〇八）、さらに民国に入ってから呉梅の『湘真閣』（姜垓と名妓李十郎とを主人公とする）へと続いていく。Ellen Widmer は、十九世紀の前半、道光年間以後に作られた、明末清初をしのぶ一連の作品について、「明代ノスタルジীরの波」と称している。たしかにこれは当時の一つの潮流になっていたといえよう。⁵⁾『影梅庵』においては、それがただちに反清復明の運動に結びつくわけではないが、ノスタルジীরの背後には、つねに現状への何らかの不满があることを思えば、これもまたある種時代の雰囲気我代表しているといえよう。⁶⁾

二、『影梅庵』伝奇の版本その他

はじめに内容を見てしまったが、ここで引き続き、『影梅庵』伝奇の版本、その成立事情等について見てみることにしたい。

彭劍南の『影梅庵』伝奇について、管見に及んだテキストは二種類ある。一つは、東京大学東洋文化研究所に蔵される道光丙戌（六年 一八二六）茗雪山房刊本であり、一つは『傳惜華藏古典戯曲珍本叢刊』（学苑出版社 二〇一〇）に影印本を取める道光八年（一八二八）の冒氏水絵園刊本である。まず後者は、封面に、

道光戊子春鐫

影梅庵

水絵園蔵板

とあり、その後には、

影梅庵楽府

溧陽彭劍南梅垞填詞

如臯冒長清不波鳩刊

との題署があつて、「較字姓氏列左」として「劉長清 湘浦」以下二十五名の名が挙げられ、さらに「較字闡秀列左」として「叢冒氏、馬冒氏、馬冒氏」の名が挙げられている。だが、それに続く本文部分については、まったく上記著雪山房刊本に同じである。

「冒長清不波」は、冒襄の後裔にあたる如臯冒氏の一族で、冒襄『同人集』の道光五年（一八二五）刊本を刊行した人である。おそらくは、彭劍南の茗雪山房の版木を、冒家が入手して水絵園で刊行したものであろう。

『傳惜華藏古典戲曲珍本叢刊』所収本には、冒頭に「白門何兆瀛通甫志、時光緒戊子四月中」とする手書きの識語がある。光緒戊子は、光緒十四年（一八八八）。識語には、この本には彭劍南の作としか記されていないが、以前見た写本には、孫如金の名も記されていた。どうして削られたのだろうか、と記されている。彭劍南と孫如金との関係については、後述する。

原刊本と考えられる彭劍南の茗雪山房刊本（東京大学東洋文化研究所蔵）は、次のような版本である。

上冊

封面に、「道光丙戌夏鐫、影梅庵、茗雪山房蔵版」とある。道光丙戌は、道光六年（一八二六）。冒頭に、以下の序文三篇が置かれる。

序一「太和李蟠根叙」

序二「道光元年（一八二一）歳在辛巳夏五月海昌楊文蓀叙」

序三「道光丙戌（六年 一八二六）春仲上浣金壇愚弟馮調鼎拜叙」

序二に「影梅庵伝奇者、瀬上彭君梅垞撫取冒公子辟疆与董姬小宛軼事、倚声而成者也（影梅庵伝奇は、瀬上の彭君梅垞が冒公子辟疆と董姬小宛の軼事を集め、音楽に合わせることでできあがったものである）」とあるので、この版本が刊行されたのは道光六年であるが、この序文が書かれた道光元年には、すでに完成していたことがうかがわれる。

続いて、張明弼の「冒姫董小宛伝」（全文）、冒襄の『影梅庵憶語』（節録）が置かれる。『影梅庵憶語』は、「紀遊」「紀遊」「紀静敏」「紀恭儉」「紀詩史書画」「紀茗香花月」「紀飲食」「紀同難」「紀讖」の各段からなるが、ここに選録されているのは、このうち「紀遊」の一部、「紀詩史書画」の一部、「紀茗香花月」の一部、「紀飲食」の一部だけである。物語に最も関連の深い「紀遇」（冒家に嫁するまで）の部分は、まったく収められていない。張明弼「冒姫董

小宛伝」と重複すると考えたからだろうか。

例えば、ここに引用されている『影梅庵憶語』の「姫能飲（彼女はいける口であった）」ではじまる一段は、お酒とお茶に関する一段であるが、そのうち、

嗜茶与余同性、又同嗜芥片。每歲半塘顧子兼挾最精者緘寄、具有片甲蟬翼之異。文火細煙、小鼎長泉、必手自吹滌。余每誦左思嬌女詩吹嘘对鼎鑪之句、姬為解頤。至沸乳看蟹目魚鱗、伝瓷選月魂雲魄、尤為精絶。每花前月下、静試对嘗、碧沈香泛、真如木蘭沾露、瑶草臨波、備極盧陸之致。東坡云、分無玉椀捧蛾眉、余一生清福、九年占尽、九年折尽矣。

お茶好きはわたしと同じであつて、さらにもに芥片が好みであつた。毎年、半塘の顧子兼がいちばんよいところを選び密封してわたしに送ってくれる。それは龍のうろこのようにかわつていて、蟬の羽根のように美しいものであつた。弱火で煙を細くし、小さな鼎で泉の水を沸かすのにも、必ず彼女みずから火を吹き茶道具を洗つた。それを見てわたしが左思の「嬌女の詩」の「吹嘘して鼎鑪に対す」の句を誦するたびに彼女は笑つたものであつた。「乳を沸かしては蟹目魚鱗を看、瓷を伝えては月魂雲魄を選ぶ」ということについて、彼女はとりわけすぐれていた。春は花の前、秋は月の下、静かに向かい合つて彼女とお茶を味わっていると、茶葉は緑に沈み、香りはただよい、まことに「木蘭が露にうるおい、瑶草が浪に臨む」といったありさまで、盧仝・陸羽の境地を極めていたのであつた。東坡は「分に玉椀の蛾眉に捧げしむるなし」といったが、私の場合、一生の清福は彼女と過ごした九年の間に窮め尽くし、九年の間にすっかり使い果たしてしまつたのである。

といった部分は、『影梅庵』伝奇第十七齣「心葉」で、冒裏が病気の董小宛をたずねる場面で、侍女がお茶を持ってくる時に侍女が歌う「南滴滴金」の歌、

這魚鱗蟹眼浮蟬翼、怕不似小鼎長泉親盥洗、把雲魂月魄評論細。

このお湯が沸き立つ時の魚鱗蟹眼のようなあぶくに蟬の翼のような茶葉が浮かんでいる。小鼎で長泉の水を沸かすのに、（小宛が）みずから洗い、雲魂月魄のような器を細かく品評するようにはいかないのではと心配です。

といったところには、この『影梅庵憶語』の語句がちりばめられている様を見ることができよう。ここに選録された部分が、本文の注釈になっているといていえないことはない。

続いて「影梅庵目録」、「影梅庵伝奇楔子」があつて、その後本文に入る。巻首には、

影梅庵伝奇卷上

溧陽彭劍南梅垞填詞

休寧孫如金雲巖正譜

性盟 第一齣

とあって、本文に入っている。上冊には、第十四齣「散賑」までの十四齣が収められる。

下冊の題簽には「影梅庵樂府下」とあり（上冊の題簽は失われている）、下冊の冒頭には、諸家が彭劍南の『影梅庵』伝奇に題した詩詞を収めている。その作者は左のようである。詩題、詞題はない。

題詞（詩）

史 炳恒齋

海陽孫如金在鎔

叔虎文芝音

桐城姚長煦皖薑

山陰周銘鼎梅生

宋 鑽北臺

潘桐鳴梧岡

史載熙元甫

績溪許昌果園

丹陽周玉瓚西賡

狄子奇惺庵

涇県朱 澧蘭皐

彭劍南の戯曲『影梅庵』『香畹楼』とその時代

鎮洋楊正源子泉

長白聯 璧玉農

蘭陵史丙肩子春

潘際雲春洲

海虞吳象嶸宓堂

海虞吳憲激筱軒

錢塘陳裴之朗玉

同懷弟劍虹燭垣

金困女史史 靜琴仙

金沙女史于月卿蕊生

受業狄 圻子京

受業史 邕稼彝

受業史 園芝谷

桐城余自伸荊門

桐城劉汝楫小瀛

常熟席振起震也

常熟席振遠梅生

昭文呉慶増修来

題詞（詞）

臨江仙 帰安葉紹棻蕙谿
朝天子 呉江郭 磨頻迦
金縷曲 上元歐陽長海棗諳
滿江紅 叔氏中鳳樓
壺中天 兄劍光薛門
菩薩蠻 金瀬女史狄 沅湘蘅
菩薩蠻 同懷弟劍采星橋
浪淘沙 上元汪 度鄴樓

詩詞を贈っていることから見て、彼らはいずれも作者の彭劍南と交遊のあった人びとと考えられる。このうち、例えば「金困女史史 静琴仙」「金沙女史于月卿蕊生」は、ともに陳文述の女弟子として名前の見える人であり、磨、汪度などは、嘉慶から道光にかけて、詩名のあった人である。ここに名が見える人のうちの幾人かについては、最後にまとめて見てみることにしたい。

続いて、巻下の巻首。

彭劍南の戯曲『影梅庵』『香畹楼』とその時代

影梅庵伝奇巻下

溧陽彭劍南梅垞填詞

休寧孫如金雲巖正譜

得調 第十五齣

本文は、第二十八齣「菊仙」で終わり、さらに次の跋二篇を収める。

跋一「嘉慶十有九年（一八一四）歳在甲戌清和月上澣稚觀山人彭劍南自題於小娜環館」

跋二「甲申（道光四年 一八二四）七月錢塘愚弟陳裴之小雲識」

序、題詞、跋などのうち、『影梅庵』伝奇成立の事情をとりわけ詳しく語っているのが、作者彭劍南自身による跋である。跋には次のようにある。

清明節後、扶病歸館、調撰澹句、神氣始復、偶檢虞初新志、養疴消遣、讀冒姬董小宛伝、心緒悵然、為於邑者久之。以彼其才、其遇勞瘁以死、天年不永、傷已。明季士大夫敦尚氣節、乃至教坊樂籍、時時產奇女子、如柳如

是之於錢牧齋、顧眉生之於龔芝麓、李香君之於侯朝宗、皆艷情奇遇、嘖嘖人口、而宛君於辟疆、則尤歷之風波疾厄之際、而終始不渝者也。夫顧媚有白門柳、李香有桃花扇、傳奇行世、獨柳董二姬無之、因為小宛戲填此劇。每日午後輒成一齣、經三旬而脫稿。以影梅庵憶語、張公亮本伝為經、旁取吳梅村題董白小像詩、范質公壬午救荒記、韓慕廬潛孝先生冒徵君墓誌銘為之証佐。末學膚受、何敢与芝麓云亭諸前輩抗行、而以稿質之友兄元甫大令、雲巖孝廉、均以為不乖於騷人麗則之旨、爰命仲弟書而藏之、俟子墨有暇、尚將為柳夫人了此重翰墨緣也。嘉慶十有九年歲在甲戌清和月上澣稚觀山人彭劍南自題於小娜環館

清明節の後、病氣になって小娜環館に帰り、しばらく静養して、ようやく復調した。たまたま『虞初新志』を見ながら病後のひまつぶしをしていたが、「冒姫董小宛伝」を読んで悲しくなり、しばらく憂鬱な心持ちであった。彼女はそれだけの才能と出会いとを持ちながら、病み疲れて亡くなり、天寿を全うできなかった。悲しいことである。明末には士大夫は氣節を重んじ、教坊樂籍にはしばしば奇女子があらわれた。柳如是と錢牧齋、顧眉生と龔鼎孳、李香君と侯朝宗など。なかでも、宛君と辟疆は、風波疾厄にあいながら、二人の思いは終始かわらなかつた。顧媚には『白門柳』があり、李香君には『桃花扇』があるのに、柳と董には彼らを描いた戯曲がなかつた。そこで、小宛のためにこの劇を作ることにした。毎日午後、一齣を作り、三十日かかって脱稿した。『影梅庵憶語』、張公亮の本伝（「冒姫董小宛伝」のこと）を經とし、そのかたわら吳梅村の「董白小像詩」、范質公の「壬午救荒記」、韓慕廬の「潜孝先生冒徵君墓誌銘」などを証左とした。末学の半可通であつて、どうして芝麓（龔鼎孳）や云亭（孔尚任）などの諸先輩と並ぶことができよう。だが、その原稿を友兄に見てもらつたところ、元甫大令（史載熙）、雲巖孝廉（孫如金）はみな騷人麗則の主旨にそむかぬといつて、仲弟に書いて藏させた。さらに暇が

有れば、柳夫人のも書いて、この重き翰墨の縁を終わらせたいと思う。

嘉慶十有九年、甲戌の年。清和月の上澣、稚観山人彭劍南自ら小嬢環館に題す。

これによって、彭劍南が『影梅庵』伝奇を作った状況が浮かび上がってくる。まずは、そのきっかけになったのが、張潮の『虞初新志』に収められた張明弼の「冒姫董小宛伝」であり、彭劍南は、董小宛が「それだけの才能と出会いとを持ちながら、病み疲れて亡くなり、天寿を全うできなかつた」ことを悲しみ、そして、明末清初の秦淮の名妓たちのうち、顧媚については龔鼎孳『白門柳』があり、李香君には孔尚任の『桃花扇』があるのに、柳如是と董小宛には彼女たちを描いた戯曲がないことが、その執筆の動機になったとある。⁷⁾

ここに、彭劍南が『影梅庵』伝奇の執筆にあたって、参考にした資料が列挙されている。呉梅村の「董白小像詩」は、『梅村家藏稿』巻二十に収める「題董白小像八首 並序」、范質公（范景文）の「壬午救荒記」とは冒襄『同人集』巻一に収める「冒辟疆救荒記序」であろう。「潜孝先生冒徵君墓誌銘」の韓慕廬は、先にも挙げた韓葵による冒襄の伝である。

跋には「その原稿を友兄に見てもらったところ、元甫大令、雲巖孝廉はみな騷人麗則の主旨にそむかぬといって、仲弟に書いて蔵させた」とあった。「麗則」は、揚雄『法言』吾子に「詩人之賦麗以則」と見える。

元甫は、「題詞」に詩を収めている史載熙元甫である。史載熙は、彭劍南と同郷の溧陽の人で、嘉慶十二年（一八〇七）の挙人である。⁸⁾『影梅庵』伝奇下冊冒頭の「題詞」に収める史載熙の詩の第一首目には、「三月晦日、得読此作」とあり、第二首目には「蒙委余正拍」という自注がある。

雲巖は、巻首題に「溧陽彭劍南梅垞填詞、休寧孫如金雲巖正譜」とあった孫如金。休寧の人で嘉慶二十二年（一八一七）の進士である。『影梅庵』の題詞に「海陽孫如金在鎔」とあり、道光『休寧県志』巻九選舉 進士 嘉慶二十二年丁丑呉其濬榜に「孫如金 字在鎔 溪東人 伝臚」とあるから、この人であることにはまちがいあるまい。ただ、『影梅庵』が書かれた時にはすでに進士になっていたと思われる孫如金のことを「孝廉（挙人）」と称していることについては、よくわからない。⁹⁾

彭劍南と孫如金、この二人の関係については、この跋の後にさらに付された後記に、次のように記されている。

余始撰影梅庵、止六折、雲巖水部見之笑曰、此桃花扇筆墨也。但如食江瑤柱、以過少為憾耳。因与雲巖製題分譜、余填詞什之七、雲巖填詞亦什之三、故京本用雲巖款、附筆於此、用誌不敢掠美之意云。稚観又記

わたしがはじめ『影梅庵』を作った時には、ただ六折だけであった。雲巖水部（水部は工部の官）がそれを見て、笑いながら「これは『桃花扇』に相当する筆墨である。だが江瑤柱（タイラガイの貝柱）を食べた時のように、少なすぎる憾みがある」といった。そこで、雲巖は題を定め、二人で手分けして曲を作った。わたしが十分の七を書き、雲巖が十の三である。だから京本では、雲巖の名（落款）を用いたわけである。これを書きとどめ、美をかすめないようにする。稚観又記

「填詞」は、この『影梅庵』伝奇を著したことをいい、「正譜」といい、「正拍」というのは、彭劍南が書いた文字を、主として戯曲の音楽について、修正を加えたことであろう。ただ、この場合、跋の後記で「雲巖は題を定め、

二人で手分けして曲を作った。わたしが十分の七を書き、雲巖が十の三である」ともいっており、孫如金が書いた部分もないわけではないようである（『中国曲学大詞典』の『影梅庵』の項では、「彭劍南、孫如金作」と記している）。もともと、この二人を比べると、孫如金の方が明らかに地位の高い人物なので、そのため巻首に名を記して箔をつけようとした可能性もないわけではない。孫如金については、他の著作も伝わっておらず、とりわけ戯曲に造詣が深かったかどうかかわからない。また、この茗雪山房刊本のほか、あるいはそれより前に「京本」なるものがあつたようだが、これについてもよくわからない。

彭劍南自身による「跋」の後に、陳裴之の「書影梅庵後」がある。この文章では、『影梅庵』伝奇をほめつつ、話は突然自身の『香畹樓憶語』のことになる。そこでは、閩湘女史が『香畹樓憶語』のために書いた序文の中に、「世有牙曠、譜入宮商、烏紗鈿鬢、登場学歩之時、吾不知此後賺人清淚、又将幾許（世に牙曠（伯雅と師曠。ともに春秋時代の音楽の名手）がおり、音楽は曲律に合い、男女の主人公が舞台上に登場した時、どれだけ人の涙をしばったかわからない）」と記してある。続けて次のようにいう。梅垞（彭劍南）は当世の牙曠である。音楽によく通じているが、兄（彭劍南）にその意（『香畹樓憶語』を劇化する意）があるだろうか。わたしの紫君は、十九歳でわたしに帰し、その年齢は宛君（董小宛）と同じであった。ところが、彩雲は散じやすく、宛君よりも五歳若くして亡くなってしまった。その生涯の大略は、太夫人（龔玉宸 陳裴之の母）の書いた伝に詳しい。わたしの『香畹樓憶語』は、みずから『影梅庵憶語』の作をお手本としたものであって、たとえ似ていたとしても、とてもかなうものではない。だが、それにしても梅兄も「個の中の人」（風趣をよくわきまえた人）である（だから『香畹樓』の戯曲を作ってほしい）。として、「甲申七月錢塘愚弟陳裴之小雲識」と題している。甲申は道光四年（一八二四）である。陳裴之はみずからの『香

『畹楼憶語』について述べているわけだが、やがて彭劍南は『香畹楼憶語』を題材とした戯曲『香畹楼』を作ることになる。

三、彭劍南について

ここで、この『影梅庵』伝奇を作った彭劍南について見ておくことにしたい。しかしながら、その伝について、詳しいことはよくわからない。莊一払は『古典戯曲存目彙考』巻十二、彭劍南の条において、

彭劍南 字梅垞、一字小陸、号稚観山人。江蘇溧陽人。

として、『香畹楼』『影梅庵』『碧城仙夢』の三作を挙げている。『碧城仙夢』の碧城は、陳文述の号であるから、ここでは陳文述を主人公とした劇と思われる。莊一払は、陳文述『頤道堂詩選』巻二十四「輓彭梅垞」の注に、

梅垞撰『影梅庵』『香畹楼』樂府、並行於世。方為余撰『碧城仙夢』、尚未脱稿。

梅垞は『影梅庵』『香畹楼』の戯曲を著し、ともに世に流行している。ちょうどわたしのために『碧城仙夢』を著してくれているが、まだ脱稿していない。

とあるのを引用している。『碧城仙夢』は完成しなかったようであるが、『香畹楼』とともに、陳文述一家を題材とする戯曲を書こうとしていた点は注目されよう。陳文述の「輓彭梅垞」の全文は、

憐君亦未過中年 君も亦た未だ中年を過ぎざるを憐れむ

呵壁荒唐欲問天 荒唐を呵壁して天に問はんと欲す

名士離騷李昌谷 名士 離騷 李昌谷

詞場絶調柳屯田 詞場 絶調 柳屯田

羅裙少婦顔癸玉 羅裙の少婦 顔 玉を癸えり

華髮衰親淚瀉鉛 華髮の衰親 涙 瀉ぐこと鉛のごとし

嗟我襟懷易振觸 嗟あ 我が襟懷 振觸し易く

乱蟬声裏一潸然 乱蟬声裏 一に潸然たり

「呵壁」は、放逐された屈原が、楚王の廟の壁に描かれた天地山川などの絵を見、世の不条理を叱責して問うたと（王逸の「天問序」に見える）。李賀の「公無出門」詩に「公看呵壁書問天（公看よ壁に呵し書して天に問ふを）」とある。彭劍南が、若くして不遇のうちに世を去ったことを憐れむ詩である。「詞場絶調」は、『影梅庵』や『香畹楼』伝奇を作ったことをいうが、それを柳永になぞらえている。

『中国戯曲志 江蘇卷』「江蘇戯曲人物題名録」（中国 ISBN 中心 一九九二 九九七頁）には、

彭劍南（一七八五？～一八五〇？） 戯曲作者。字梅垞、一字小陸、号稚觀山人。溧陽人。作有『影梅庵』『香
晚楼』伝奇及『碧城仙夢』雜劇。前二種合為『茗雪山房二種曲』。

彭劍南（一七八五？～一八五〇？） 戯曲作者。字は梅垞、一に字は小陸、号は稚觀山人。溧陽の人。作品に『影
梅庵』『香晚楼』伝奇及び『碧城仙夢』雜劇がある。前二種を合わせて『茗雪山房二種曲』という。

とある。ここで、『碧城仙夢』は雜劇であるといっているが、その根拠はよくわからない。また、ここで、没年を一
八五〇としている根拠も不明である。陳文述『頤道堂詩選』卷二十四には、道光八年（一八二八）に亡くなった改琦
を悼んだ「輓改七癖」が収められ、それより後に「輓彭梅垞」詩が置かれるから、おそらくその頃に亡くなったので
はないかと思われる。『光緒溧陽縣志』卷九人物志 文封に、

彭劍南 廩生。以子君毅加級 贈中議大夫河源縣知縣

彭劍南 廩生。息子の君毅によって級を加えられ、中議大夫河源縣知縣を贈られた。

とある。つまり、息子の力で、名目的な官職を与えられたことがわかる。息子の彭君毅については、同じく卷八選舉
志 進士に、

彭君毅 癸亥 恩科 翁會源榜 庶吉士 改広東新会県知県 見宦績
彭君毅 癸亥 恩科 翁會源の榜 庶吉士 広東新会県知県に改められる。宦績に見える。

とあって、癸亥の年、つまり彭劍南没後の同治二年（一八六三）に、進士になっていることがわかる。そして、同卷九人物志 宦績に、彭君毅の伝が立てられている。そこには、彭君毅が広東新会県の知県であった時のこと、大雨が降り続いて、順徳、香山、新会の民三千人あまりが山の上に避難した時、君毅は、食べるものがなくなることを見越して、ただちに食料を準備して運ばせた。その結果、子供が一人亡くなっただけの被害ですんだ。総督の張之洞が、今の汲黯であるといった、といったことが記されている。

彭劍南について、先に挙げた『影梅庵』の「太和李蟠根叙」には、

溧陽彭君小陸、余庚午分校所薦士也。才高繡虎、技学屠龍、以終賈之齡擅盧駱之体、熊熊之光上燭乎星垣、渾渾之源旁汨乎宿海、良繇琅函藻笈、讀破万卷、遂爾赫蹏栗尾、立就千言、頃以所撰影梅庵院本遣使索叙。

溧陽の彭君小陸は、わたしが庚午の年の試験で推薦した士である。その文才は高くすぐれ、学藝にひいで、終軍や賈誼の年（年が若いこと）で、盧照鄰や駱賓王のような文章をよくした。輝く光は、上にあるは星垣に輝き、渾渾とわき出す源は、とうとうと海に流れる。まことにすぐれた文才を抱き、万卷の書を読破している。かくして筆をふるえば、たちどころに千言ができあがる。近頃、使いをつかわして、その著作である影梅庵院本の序を求めてきた。

とある。この「庚午」がいつにあたるのかが問題であるが、嘉慶『溧陽県志』卷九職官志 文題名 溧陽県教諭に李蟠根の名が見え、そこに、

拋県冊学冊乾隆二十三年正月十九日到任、三十三年五月二十三日卸任。

とある。ところが、「庚午」は乾隆十五年（一七五〇）、もしくは嘉慶十五年（一八一〇）になり、いずれも県志のいう時期には相当しない。ただ、道光のはじめに『影梅庵』が書かれていることを考えると、嘉慶十五年の可能性の方が高そうである。

嘉慶十五年に生員にはなったが、その後の科挙には合格できずに終わった人ということになる。また道光五年（一八二五）の『香畹楼』伝奇の「自叙」に、

今歳夏初、方破釜沈舟、為背城借一之計、而命途多舛、遽撰張太常之疾甚劇、幾以盲廢。跌坐布団三閱月、甫獲小愈。余壬午以是疾罷省試。至是者再、天生我材、殆將以樗櫟終耶。

今年の夏の初め、背水の陣をしいて、最後の決戦を挑む（科挙への最後の挑戦）つもりであった。ところが運命はつたなく、ひどい張太常の病（唐の張籍は眼疾を患っていた）を得て、ほとんど目が見えなくなるところであった。ふとんの上に三ヶ月も座っていて、ようやく小康を得たのであった。わたしは壬午の年（道光二年 一八二二）にもこの病気によって郷試を受けられなかった。ここに至って、再び同じことが起こったのである。天

はわたしを生みながら、ほとんど役に立たないものとして終わらせようというのだろうか。

とあって、道光二年、道光五年の郷試に、いずれも病気によって受験できなかったといっている。『影梅庵』の第二十回「帰田（父の隠棲）」において、冒起宗は、冒襄がまた科挙に合格できなかったのではと想像するが、

咳、你父親已被虛名誤了一生。你還要博這虛名何用。

ああ、おまえの父親は虚名のために生涯を誤った。おまえがまたこんな虚名を求めて何になろう。

といったせりふを吐く。こんなせりふを吐かせたのは、科挙の試験が思うにまかせなかった彭劍南自身の思いだったのかもしれない。

四、『影梅庵』から『香畹楼憶語』へ

『香畹楼憶語』は、陳裴之が、もと南京秦淮の妓女であり、その側室となった王子蘭（紫湘）が、わずか二十二歳の若さで亡くなってしまった後、冒襄の『影梅庵憶語』にならって、彼女との思い出のさまざまを書き綴った作品である。『香畹楼憶語』に付された序文のうち的一篇である閩湘居士の序（甲申七月扶風閩湘居士揮淚謹書」と題する。甲申は道光四年 一八二四）に次のような一段がある。

広平居士以梅垞生新譜影梅庵伝奇、乞雲公子題詞、俾紆折玉之感、公子讀之益增悽恨、時距紫妹之仙去者十日矣。閩湘請於公子曰、影梅庵憶語、世艷稱之、然以公子之才品、遠過參軍、紫妹之賢孝、亦踰小宛、且此段因縁、作合之奇、名分之正、堂上之慈、夫人之恵、皆千古所罕。前日読君家大人慈訓、有曰、惜身心而報以筆墨、俾与朝雲菫桃並伝、公子其有意乎。公子乃坐碧梧庭院、滴淚濡毫、文不加点、隨時授余讀之、情文相生、悽艶万状。

広平居士が梅垞生（彭劍南）が新たに作った『影梅庵』伝奇を持ってきて、雲公子（陳裴之）に詞を題するよう求めた。伝奇では若くして亡くなった者への思いが述べられており、公子はそれを読んでいますますつらく恨む気持ちを増すことになった。なぜなら、紫妹（王子蘭）が亡くなって十日しかたっていないからである。閩湘が公子に請うてこういった。『影梅庵憶語』は、世に艶やかな話としてもはやされております。しかし、あなたの才能人品は、はるかに參軍（冒襄を指す）を越えておりますし、紫妹の賢孝もまた、董小宛を越えるものがあります。しかも、この一段の因縁、めぐりあわせの奇遇、名分の正しさ、父母の慈しみ、夫人の恵みなど、どれも千古に罕なものです。先にあなたの家の大人の慈訓を読んだところ、『身心を惜みて、報いるに筆墨を以てす』とありました。朝雲や菫桃（朝雲は蘇軾の側室。菫桃は寇準の側室。ともにすぐれた側室の代名詞）と同じように（紫湘のことを後世に）伝えさせる、あなたにそのお気持ちがおありですか」と。公子はそこで、碧梧庭院（『香畹樓憶語』に「碧梧庭院」の四字が見え、碧梧庭院は、南京の閩湘たちの住まい、つまり王子蘭がもっていた家の名のような）に座って、涙で筆を湿らせ、文には点も加えず、書いた先からわたしに読み聞かせてくれた。情文相生じ、悽艶万状というありさまであった。

この文章の作者である閩湘がいったい誰なのか問題であるが、『香畹樓憶語』には、「偶与其嫂氏閩湘玉真論及身後名（たまたま彼女（王子蘭）の嫂にあたる閩湘、玉真と死後の名声の話になり）」とあり、また王子蘭が南京で亡くなる時に、閩湘が、彼女の爪と髪の毛を切ってやったことが見える。玉真についても、「其嫂繆玉真」と見える。閩湘、玉真は、ここではおそらく南京の色町における王子蘭の姉妹たちであろう。それぞれに結婚していることから嫂といったのだと思われる。

ここに見えるように、そもそも広平居士（この人がまたよくわからない）が、彭劍南の『影梅庵』を陳裴之のとこへ持ってきて、序文を求めた（その序文が実際にあることは、すでに見た）。それが、ちょうど董小宛と同じように南京秦淮の出身であり、陳裴之の側室となった王子蘭が亡くなって十日後にあたっていたのである（王子蘭が亡くなったのは、道光四年の七月四日）。そこでこの閩湘が、陳裴之に王子蘭の思い出を記すよう勧めたのだという。かくしてできあがったのが『香畹樓憶語』である。つまり、『香畹樓憶語』の誕生には、そもそも『影梅庵憶語』と『影梅庵』伝奇が深く関わっていたことが知られるのである。

閩湘の序文に、「父母の慈しみ、夫人の恵み」とあった。ここで、陳裴之の家族について触れておかなければなるまい。まずはその父母であるが、陳裴之の父親は、袁枚と同じく女性の弟子を持ったことで知られる陳文述その人である。陳文述については、日本でも合山究「陳文述の文学と逸事と女弟子」があつて、その生涯と文学について紹介し、「艷体文学者としての陳文述」「美人の遺跡、祠墓の修復などの逸事」「閩秀詩人の妻女たち」「女弟子たち」などについて、人物、作品とその周辺を描き出している。¹⁰ 陳文述には『頤道堂詩外集』巻七に収める長編の詩「董小宛像」もあり、冒襄と董小宛に関心を持っていたこともうかがわれる。南京秦淮についても、同じく『頤道堂詩外集』巻九

に「秦淮訪李香故居題桃花扇樂府後」「秦淮雜詠題余曼翁板橋雜記後」また「後秦淮雜詠題秦淮画舫錄後」などの作があり、深い関心を抱いていたことが知られる。

陳文述は、乾隆三十六年（一七七二）に生まれ、道光二十三年（一八四三）に没している。錢塘（杭州）の人。字は雲伯、号は碧城外史、頤道居士など。嘉慶五年（一八〇〇）に舉人になったものの、ついに進士になることはできなかった。だが、阮元にその才能を認められ、治水や官塩の管理を司る幕客として頭角をあらわし、江都県（揚州）の知県になっている。

陳文述は、女弟子を持ったことで知られる袁枚のあとを承けた人物であり、袁枚が『隨園女弟子詩選』を編んだのと同様に、『碧城仙館女弟子詩』や『西冷閨詠』など女性の詩集を編んでいる。なお、袁枚もまた錢塘の人であって、同郷である。そして、後で触れる席佩蘭や婦懋儀のように、隨園女弟子でありつつ、陳文述とも交遊のあったものもある。

陳文述の妻の龔玉晨は、ほかならぬ王子蘭が亡くなった時、「紫姬小伝」を書き、また陳文述の『碧城仙館女弟子詩』の序も書いている。残る文章は少ないが、これだけの文章を書くことができる才女であったことはまちがいない。

陳裴之は、その陳文述と龔玉晨の間にもうけられた長男である。不幸なことに、裴之は道光六年（一八二六）、十三歳にして、父の陳文述、母の龔玉晨に先立って亡くなっている。陳文述に「裴之事略」（『頤道堂文鈔』卷十三）、妻の汪端に「夢玉生事略」、徐尚之に「陳小雲司馬伝」（『頤道堂文鈔』卷十三に附録）がある。『清代学者象伝』には、妻の汪端と並んだ夫婦の肖像が収められ、伝がある。また朱劍芒「香畹楼憶語考」（『美化文学名著叢刊』国学整理社一九三六の『香畹楼憶語』）、近年の李彙群『閨閣与画舫 清代嘉慶道光年間的江南文人和女性研究』（中国伝媒大

学出版社 二〇〇九) 第五章「陳裴之的真情与幻情」には、陳裴之に関する詳細な伝がある。

これらによれば、陳裴之は、陳文述夫妻に二男三女があったうちの、長男として生まれた(乾隆五十九年 一七九四)。次男の荀之が早世したため、裴之は陳家のただ一人の跡取りとして、大切に育てられた。裴之はまた、それにそむかず、幼少の頃からすぐれた詩才をあらわした。十七歳の時に、童試に及第し、生員になった。しかし、その後、郷試を受け続けたが、ついに及第して举人になることはできなかった。

嘉慶十三年(一八〇八)、父の陳文述は蘇州に家を構え、そこに住むようになる。そして道光元年(一八二一)に江都県(揚州)の知県になった。裴之も父について揚州に赴く。陳裴之もまた、父親の道を受け継ぎ、幕客として治水などに腕をふるい、上官から高く評価され、実現はしなかったものの、同知の地位の奏請を受けた。この間、妻の汪端は蘇州にあった。夫のそば仕えをさせる都合もあつて、側室の王子蘭(紫湘)を迎えさせたのは、この時のことである。ところが、道光三年(一八二三) 陳文述の父(裴之の祖父) 奉政公が亡くなったため、喪に服するため蘇州に帰った。その翌四年の七月、王子蘭が亡くなり、『香畹樓憶語』を著している。

道光五年(一八二五)には、北京に行つて官職を得ようとしたものの、うまくいかなかった。道光六年、雲南府の通判に任じられる。しかし、任地があまりにも遠いために赴かず、途中の武漢でやはり幕客となつていて、この年の暮に亡くなった。

陳裴之は、『香畹樓憶語』ばかりでなく、捧花生の『秦淮画舫録』(南京秦淮の妓女の記録)の序文も書いていることによつても知られるように、父の陳文述同様、風流な世界にもよく通じていたようである。¹⁾

この陳裴之の妻が汪端である。陳文述一家の女性の中で、あるいは最も文名をうたわれた女性が汪端かもしれない。

彼女は名門の生まれで、母が若くして亡くなったので、母の妹である梁徳繩のもとで育てられた。梁徳繩は、彈詞『再生縁』の続作者としても知られる才女。二十歳の時に、陳文述の息子である陳裴之に嫁した。汪端は、明初の詩人高啓を高く評価し、錢謙益の『列朝詩集』などが、高啓を低く評価しているのを不満とし、明代詩人の評価をくつがえすべく、『明三十家詩選初集二集』を編んだ。

病氣になった舅、陳文述の平癒を祈り、四年間「夫婦異処」の生活を送った。道光元年（一八二一）に陳文述が江都県の知県となり、陳裴之もそれについて揚州へ赴くことになった際に、夫の陳裴之に側室を持つことを勧め、王子蘭（紫湘）を迎えさせたのは、この汪端である。汪端にはまた、自分自身は、『明三十家詩選』の編集に専念したいという動機もあったようである。王子蘭が亡くなった時には、やはり十六首の詩を作って悼んでいる。

汪端は夫に先立たれた後、夫の『澄懷堂遺詩』を刊行した。陳文述に先んじて亡くなったため、陳文述は彼女のために「孝慧汪宜人伝」（汪端『自然好學齋詩鈔』）を著している¹²。陳文述には、男の子二人のほかに三人の娘、長女の華姫、次女の麗姫があった（三女の蕙は早世）。王子蘭が亡くなった時、二人の娘はともに哀悼の詩を作っている。また、陳文述には側室である管筠があり、彼女もまた王子蘭を悼む詩を捧げている。

朱劍芒が「香畹樓憶語考」において「一門風雅」の四文字によって表現しているように、まずはこの陳文述一家、妻や娘、あるいは嫁などの女性を含めて一家全員が文学をよくしたところは、世にもまれな特質といってよからう。その空気が陳裴之の『香畹樓憶語』を生んだといえるわけだが、それもまずは陳文述が、女性たちの才能を高く評価する考えを持っていたからにはかななるまい。

かくして作られたのが、『香畹樓憶語』である。『香畹樓憶語』には『湘煙小録』という別名もある。王子蘭（紫湘）

の思い出を記した、陳裴之による本文が『香畹樓憶語』である。香畹樓とは、王子蘭のすまいの名である。『香畹樓』伝奇の第三十一齣「選餞」に、

下官已將父親做的誄文、母親做的小伝、庶母姉妹夫婦做的輓詩、刻成一冊、附以下官香畹樓憶語、題曰湘煙小録。

わたし（陳裴之）は、すでに父親が作った誄文、母親が作った小伝、庶母（父の妾）、姉妹、大婦（正妻）たちが作った輓詩を一冊に刻し、それにわたしの『香畹樓憶語』を付して、『湘煙小録』と題した。

とっているように、陳裴之自身の『香畹樓憶語』に加えて、一家の人々が彼女のために書いた文章や詩、そして友人たちが作った詩を合わせた全体が『湘煙小録』である。後で触れる彭劍南の「香畹樓序」でも、陳裴之が『湘煙小録』を示して、戯曲を作るよう頼んだとある。

『香畹樓憶語』に付された題詩などは次のようである。

香畹樓憶語序言

「甲申巧月。太原瑞蘭雪涕拝題」

「甲申七月扶風閨湘居士揮淚謹書」

「紫湘誄」 錢塘 汪端 允莊（頤道居士（陳文述）の識語を付す）

「同作」 管筠 静初

「又」 陳華嫻 萼仙

「又」 陳麗嫻 茗仙

題詞

「寄題朗玉弟湘煙小錄後」 金壇女史 吳規臣 香輪

「題小雲夢玉詞後」 吳江 郭馨 頻迦

「題朗玉兄香畹樓憶語後調寄一萼紅即送朗玉之江北」 華亭 改琦 七癭

「小雲司馬兄寄示湘煙小錄情文交摯使人不忍卒讀才華衰減勉題四絕以博破涕之笑」 昭文 孫原湘 子瀟

「寄題小雲司馬香畹樓憶語後」 昭文女史 席佩蘭 道華

「奉題朗玉兄湘煙小錄後」 吳興 曹林堅 良甫

「奉題小雲兄湘煙小錄後調金縷曲」 上元 汪度 鄴樓

「奉題朗玉弟湘煙小錄即送入都」 琴河女史 婦懋儀 佩珊

「紫湘主人仙逝金陵行館茲當帟旒製此奉輓以摠朗玉弟愴情」 南城 陶焜午 香泉

「誦朗玉弟湘煙小錄綴成韻語代写哀思」 吳興 葉廷瑄 茗生

「陳孟楷通守副室王碩人哀辭」 吳興 曹培 稼山

「紫姬小伝」 「道光四年歲次甲申七月中錢塘龔玉晨羽卿撰」

「跋」「道光甲申孟冬吳沈秉鈺跋於吳中懷雲亭」

『香畹樓憶語』は、王子蘭の思い出を記したのだが、断片的な記録であるうえに、それらが必ずしも時間を追って整理されているわけではなく、なかなかわかりにくいので、その内容については、次に『香畹樓』伝奇のあらすじを見るところであわせて見てみたい。ただ、『香畹樓憶語』と『影梅庵憶語』との関係について一言触れておくならば、例えば『香畹樓憶語』の次の一段。

姫素豢狸兒、名瑤台兒、玉雪可念。余初訪碧梧庭院、輒依余宛轉不去。姫酒半偶作諧語、閨湘紀以小詞曰、解事雪狸都愛你、眠香要在郎懷裏者是也。洎自姫婦省、閨湘猶引前事相戲。姫逝後、瑤台兒繞棺悲鳴、夜臥茵次。物猶如此、余何以堪。

彼女はもともと瑤台兒という猫を飼っていた。雪のように白く、かわいらしかった。わたしが最初に碧梧庭院を訪れた時、すぐさまわたしにまつわりついて離れなかった。彼女が酔いごちになって、ふと冗談をいったところ、閨湘がそれをこんな句にまとめ上げた。「もののがかった白猫もすっかりあなたが好きになり、あなたのふところの中でなければ眠らない」というのがそれである。彼女が（病気のため）帰省した時、閨湘は戯れにこの昔の話を持ち出した。彼女が亡くなった後、瑤台兒は棺にまつわりついて悲しそうに鳴いており、夜は彼女のふとんに寝たのである。物でさえこうなのである。わたしがどうして彼女を失った悲しみに堪えられようか。

かつての楽しかった日々の思い出と、彼女を失った現在との対比、この筆法がまさしく『影梅庵憶語』のそれなのである。

五、『香腕楼』伝奇について

彭劍南の『香腕楼』伝奇は、陳裴之の『香腕楼憶語』を戯曲化した作品である。『影梅庵憶語』の後を承けた『香腕楼憶語』を戯曲化したという意味でも、同じ作者による『影梅庵』伝奇との関係は深い。ここでは、『香腕楼』伝奇全三十二齣の内容を簡単に追ってみよう。『香腕楼』は京都大学文学部に蔵されている。

上冊

封面には、

道光丙戌秋鐫

香腕楼

茗雪山房蔵板

とある。道光丙戌は、道光六年（一八二六）。冒頭に序文二篇がある。

彭劍南の戯曲『影梅庵』『香腕楼』とその時代

序一「叙 道光乙酉（五年 一八二五）涂月金壇愚弟馮調鼎拜序」

序二「自叙 道光乙酉（五年 一八二五）長至前三日稚觀道人彭劍南自叙於茗雪山房」

卷首には、

香畹樓卷上

溧陽彭劍南梅垞填詞

同里宋 鑽北臺正譜

と題する。そして、こちらにも、下冊の冒頭に、以下の題詩が置かれている。

題詞

「浣溪紗奉題梅垞仁弟香畹樓伝奇戲効蕃錦集体」海陽孫如金雲巖

「賀新涼用東坡韻奉題梅垞仁弟香畹樓樂府」史載熙元甫

「虞美人題小陸大弟香畹樓伝奇為陳小雲司馬作」兄劍光薛門

「題伯兄香畹樓院本兼呈朗玉別駕」同懷弟劍虹燭垣

〔陳小雲司馬追悼亡姬晚君作香晚樓憶語伯兄倚声填詞為題詩餘一闕調寄菩薩蠻〕 同懷弟劍彩星橋

〔朝天子題稚觀夫子香晚樓伝奇〕 金沙女史于月卿蕊生

〔題梅垞兄公香晚樓伝奇得兩截句〕 金困女史史 静琴仙

〔浪淘沙題小陸大兄香晚樓〕 弟劍華煥豊

〔奉題梅垞兄香晚樓即次見贈元韻〕 金壇馮調鼎玉溪

〔奉題梅垞弟香晚樓樂府〕 宋 鑽北臺

〔讀香晚樓樂府賦題兩絶〕 金壇于 選巽之

〔臨江仙集唐奉題一笑〕 再叔瑛紫亭

〔家元甫大令招飲喜晤梅垞以香晚樓見示即席口占忝属〕 史 麟仲仁

〔題梅垞尊兄香晚樓樂府〕 良常馮 照縵卿

『香晚樓』は『影梅庵』と同じ版式であり（ともに本文毎半葉九行二十二字）、両者を合わせて『茗雪山房二種曲』と称する場合もある。

『香晚樓』伝奇の成り立ちについて、道光五年の彭劍南「自叙」には次のようにある。

香晚樓伝奇為陳朗玉司馬作也。余友兄宋北臺明経、僑居白門、每旋里称当世奇材異能之士、無有出朗玉右者。余固心識之、未暇謀面也。客秋北臺招余為平山之遊、始識朗玉於揚州、傾蓋如故、余稍長於朗玉、以弟畜焉。時

朗玉新喪姫紫湘、貌甚戚、每向余縷述紫君賢孝事、輒淚下如連珠。因携湘煙小録一冊示余、且曰、刻羽引商、非梅兄不能鑑余哀情、亦非梅兄不能写余側感、梅兄其有意乎。余方挾案讀龔太夫人所作紫姬小伝、讀畢。北臺從旁愆憑。

『香畹樓傳奇』は、陳朗玉司馬（陳裴之）のために作ったものである。わたしの友兄である宋北臺明経は、南京に仮住まいしていたが、郷里に帰るといつも、当世奇才異能の士といえば、朗玉の右に出るものはいないといっていた。わたしは心の中でそれをすっかりおぼえていたが、まだ直接会う機会がなかった。去年の秋、北臺がわたしを平山の遊に招いた時、はじめて揚州で朗玉に面識を得て、まるでむかしからの知り合いであるかのように、意気投合した。わたしは朗玉より少し年上だったので、弟として応対した。そのころ、朗玉は側室の紫湘をなくしたところで、その様子はとても悲しそうであった。そして、わたしに紫君が賢明で孝行であったことをこまごまと述べ、連珠のように涙をこぼしたのであった。そして、『湘煙小録』一冊を持ってきてわたしに示したのである。そして、こういった。「戯曲にするのには、梅兄さんでなければわたしの悲しい気持ちを理解することはできない。また梅兄さんでなければわたしの悲しみを書くことはできない。兄さん、やっていただけですか。」わたしはちよつど机に向かつて、龔太夫人が作った「紫姫小伝」を読み、読み終えたところであった。北臺はかたわらから、それを勧めたのであった。

として、陳裴之自身が、彭劍南に『湘煙小録』を贈り、王子蘭の生涯を題材にした戯曲を作ることを依頼したのであった。跋は続けていう。道光五年（一八二五）の夏、彭劍南は、この年の秋に行われる科擧の郷試を受けようと、勉強

をはじめてみたのだが、三月もの間病気になって、結局試験を受けられずに終わってしまったのであった（この点については、先に引用した）。それで、

息壤在彼、按譜尋声、朋従既寡、同調亦罕。日成一齣、不軽示人、経月餘而脱稿。友兄史默齋明府見之撫案於
邑曰、嗟乎、梅垞余壺不知夫情之生於文、文之生於情也、録寄朗玉、当令司馬馬青衫湿也。

〔『香碗楼』の戯曲を書くという〕約束は守らねばならず、曲律に合わせて曲を作ろうと思った。友人従者も少ないうえに、同じ趣味を持つものもまれであった。そこで、一日に一齣づつ書いてみたが、容易には人に見せなかつた。一月ほどして脱稿した。友兄の史默齋が見て、机をたたき、悲しそうにこういった。「ああ、梅垞。わたしは、これほど情が文から生じ、文が情から生ずる作品をまったく見たことがない。書き写して朗玉に送ってあげれば、司馬は涙で青衫を湿らせることになるだろう（白居易の「琵琶行」に「江州司馬青衫湿」）。」

依頼を受けた彭劍南は、もともと科擧の試験を受けようと思ったのに、病気になって受験ができなかつた。いわばその心のすきまをさうずめるかのように、『香碗楼』伝奇の執筆にとりかかつたのであつた。

ところで、『香碗楼』という戯曲について、ほかならぬ『香碗楼憶語』の本文の中に、次のような一節がある。

時広寒外史有香碗楼院本之作、余因興懷本事、紀之以詞曰、（詞略）。姫読之、笑授画冊曰、君視此影、頗得神似否。乃馬月嬌画蘭十二幀、懷風抱月、秀絶塵寰、幀首題紫君小影四字、則其嫂氏閨湘手筆、是冊固閨湘所藏、

以姫帰余為慶、臨別欣然染翰、納之女兒箱中者。余欲壽之貞珉、姫愀然曰、香閨韻事、恒慮為俗口描画。余乃止。時に広寒外史に『香腕楼』院本の作があつて、わたしはそこで、その物語に感慨を催し、それを詞に記した。(詞は略)。姫(王子蘭)はそれを読むと、笑つて画冊を渡してこういった。「あなたはこの絵をごらんになつて、よく似ているとお思ひですか」と。それは、なんと馬月嬌(馬湘蘭)が描いた蘭の十二幅であつて、風を懷き月を抱いて、この俗世における秀絶であつた。装幀の冒頭には、「紫君小影」の四字が題してあり、それは彼女の嫂氏である閩湘の手筆であつた。この画冊はもとより閩湘の所蔵であつて、紫湘がわたしに帰したのを祝して、別れに臨んでよろこんで筆を執り、彼女の嫁入り支度の箱の中に入れたのであつた。わたしは、これを石に刻んで永遠に伝えようと思つたのだが、彼女は悲しそうな表情でいった。香閨の韻事は、いつも俗人の口にのぼることをおそれます、と。それで、わたしはやめたのであつた。

つまり、ここに広寒外史なる人の作つた『香腕楼』の院本つまり戯曲があつたことになる。嚴敦易「彭劍南伝奇二種」(嚴敦易『元明清戯曲論集』中州書画社 一九八二 下編 清人戯曲提要)では、

この『香腕楼』院本と本劇(彭劍南の『香腕楼』)とは異なつた二種の作品であつて、広寒外史は彭氏ではない。二種は同名ではあるが、一つは歎びを記したものであり、一つは悲しみを述べたものである。

といつている。広寒外史の『香腕楼』を見ることはできないものの、あるいはこちらが先に存在し、王子蘭生前の楽

しみに満ちた時代を描いたものであったかもしれない。

ここで、簡単に『香碗楼』伝奇のあらすじを追ってみることにしよう。

上冊 香碗楼巻上

第一齣 蘭因（王子蘭の因縁）

貼（西王母）、外（碧落侍郎）、老旦（上元夫人）、小生（王子晋）、旦（劉懿真）、小旦（董双成）、外末（星官）、生（東方朔）

西王母登場。王子晋（王子喬）と劉懿真（劉仙姑）はたがいに思い合っているから、碧落侍郎を頤伯居士（陳文述）、上元夫人を羽卿太君（龔氏）として俗世に降し、子晋を息子とし、夢玉公子（陳裴之）と号させる。さらに、懿真を淑姬夫人として、子晋の正妻（汪端）にさせ、董双成（西王母の侍女）を紫瀟女子として、子晋の妾（王子蘭）とす。そして、紀離容（上元夫人の侍女）を碧落侍郎の側室（管筠）、子晋の妹の観靈・観香を上元夫人の愛女（陳華姬、陳麗姬）とし、北寒玉女、東華玉女をつかわして、双成を護らせるよう命ずる。

碧落侍郎、上元夫人、王子晋、劉懿真、董双成が、それぞれに挨拶をして、俗世に降ってゆく。

東方朔は、梅垞生（彭劍南）となって、彼らのことを戯曲に作ることになる。

ここに登場する人物たち、西王母をはじめとして王子晋（王子喬）、劉懿真（劉仙姑）、上元夫人、董双成、紀離容など、いずれも（実在の）仙人たちである。

第二齣 花瑞（花の瑞祥）

小生（雲楷）、旦（莊淑姬、汪端）

雲楷（陳裴之）登場し自己紹介。天下の奇才と称されている。父は江都相、母は龍太君。父は、仕事の疲れから病気になる。雲楷は華陀の廟にお参りして薬をもらい、夫人の莊淑姬は病氣平癒のために「長齋繡仏」を誓って、毎日『観音経』を誦している（『香腕楼憶語』に見える）。夫人とともに仏殿で祈願。

末（院子）が、殷麗生が建蘭を届けてきたことを告げる。雲楷、夫人とともに、庭の花を見る。新たに香腕楼が落成したことから、夫人が雲楷に側室を持つことを勧め、雲楷はそれに従い側室を持つことにする。

第三齣 心許（密かな結婚の願い）

小旦（紫瀟）、雑旦（馬閨湘）、貼（王瑞蘭）

王氏子蘭（小字は紫瀟）登場。秣陵（南京）の人である。「家近青楊之巷、門臨白鷺之洲（家は青楊の巷に近く、門は白鷺の洲に臨む）」、これは汪端の紫瀟を悼む詩の序に見える言葉。南京の秦淮を指す。姉妹はみな、名門に嫁いでおり、いまは閩湘女史に面倒をみてもらっている。

雑旦（馬閨湘）、貼（王瑞蘭）がたずねてくる。われわれのお婆の停雲主人が、娘の幼香妹子を夢玉公子（雲楷）の側室にしようとした。ところが、夢玉公子は、詩を寄せて、それをやんわり断ったという話をして、その雲公子の詩箋を紫瀟に見せる。

紫瀟、雲公子の詩を読んで感動し、雲公子の側室になりたいと願う。幼香妹子がはじめに側室の候補として名が挙っ

ていたこと、停雲主人のこと、この詩のこと、ともに『香腕楼憶語』に見える。『香腕楼憶語』では、王子蘭が嫁入るに際して、その仲立ちをした六一令君が、「従来名士悦傾城、今傾城亦悦名士（従来名士が傾城の美女を好んだものだが、今は傾城の美女も名士を好む）」（「名士悦傾城」は湘東王の詩。いま梁簡文帝蕭綱の「和湘東王名士悦傾城」が残る）というが、『香腕楼』伝奇では、紫瀟自身がこのせりふを述べる。

第四齣 目成（目で語る）

小生（雲楷）、小旦（紫瀟）

雲楷が、南京の妓楼をたずねてくる。

小旦（紫瀟） 登場。雲公子の詩を読んでから、いつも公子のことを考えている。

小生（雲楷） 登場。二人が出会う。紫瀟は、詩を読んで以来ずっと、雲公子の才を慕っていることを告げる。

二人は意気投合し、紫瀟は、自分が公子の世話をしたいと告げ、公子は、家に帰って話をまとめることを約す。

第五齣 選詩（詩を選ぶ）

旦（莊淑姬）、四旦（雲氏蓼仙、陳華姬）、五旦（雲氏苕仙、陳麗姬）、丑（侍女）

幼い時から学問が好きで、針仕事にがて。息子が一人ある。それで学問をして、『明詩初二集』を編纂している。

四旦（雲氏蓼仙）、五旦（雲氏苕仙） 登場。ともに明代の詩を論ずる。丑の侍女が来て、早く寝るようにいう。丑は、詩の議論を聞いて退屈そうな様子。

第六齣 遊園（庭に遊ぶ）

生（殷麗生）、末（商二遊）、小生（雲楷）
夏林園を訪れ、ともに酒を酌み交わす。

第七齣 和衷（心合わせて）

生（河庫道）、外（使相錢次公）、末（河督李澄溪）
治水の難しさを語る。

陳裴之の伝である汪端の「夢玉生事略」には、「受知於阮雲臺、慶蕉園兩宮保、孫寄圃節相、曾賓谷齋使、錢恬齋都轉、吳省庵觀察、王簣山廉訪」とあつて、陳裴之が実際に、父の陳文述の關係を通して、当時の高官と接觸があり、その才を認められていたことが述べられている。

第八齣 安瀾（波を鎮める）

浄（河伯の馮夷）、雜（猪龍）
崑崙からの黄河の流れを語る。

各々の水官（龍長史、鼉將軍ほか）に、持ち場を見回るよう命ずる。猪龍登場。水の量をあやまったことで罰を受ける。

第九齣 置簾（側室を置く）

丑（蘇州の船戸）、小旦（紫瀟）、老旦（龍氏太君）、旦（莊淑姫）、四旦（雲氏萼仙）、五旦（雲氏苔仙）、生（殷麗生）、末（商二遊）

蘇州の船頭が、雲府の側室を娶るために南京にやってくる。着飾った紫瀟を載せて蘇州へ向かう。

老旦（龍氏太君）登場。息子の楳が、父親と科挙同年である六一令君を仲立ちにして、金陵王氏の娘を側室にした。紫瀟が家に着き、みな顔を合わせる。

生（殷麗生）、末（商二遊）がやってきて、紫瀟を見、その美しさをほめる。夜もふけ、小生は小旦の手をひいて退場。

第十齣 謁閣（高官に拝謁する）

小生（雲楳）

小生（雲楳）官服で登場。錢次公と河督の李澄溪の推薦によって、真州の治水を司ることになった。錢次公、李澄溪に目通りをし、献策をして、その才を認められる。

第十一 合螺（指紋を合わせる）

小生（雲楳）、小旦（紫瀟）

紫瀟を得て、二人は仲むつまじく暮らしている。二人はともに、左手の人差し指に巻いた模様の指紋があり、二人

で合わせてみる。『香畹楼憶語』に見える情節。

第十二 護雷（雷から護る）

老旦（龍太君）、生（雷神）、貼（電母）、小旦（紫瀟）

太君は雷がきらいなので、小旦（王紫瀟）がそばに行つて面倒を見る。雷についての故事が述べられる。紫瀟の孝行ぶりを示す。

第十三 齣 濬河（川を浚う）

付浄（儀徴の里正）、小生（雲楷）、末生（紳士）、外、副浄（塩商）

治水の労働と税の苦しさを述べる。小生（雲楷）、彼らに賞を与えてねぎらう。紳士たち、また塩商たち、つきつきに雲楷のもとを訪れ、治水に感謝する。

第十四 齣 偵梟（賊を偵察する）

浄（張鉄漢）、副浄（飛天夜叉）

公子の友人である莊士の張鉄漢、私塩をとりしまる。飛天夜叉登場。飛天夜叉は私塩を扱う賊の頭目。

第十五 齣 神医（神医）

浄（華陀）、葉神

四人の葉神が登場し、葉について語る。

江都令の雲武襄が病におちた時、息子の妻の莊淑姫が、長斎をし仏を刺繡した。そのため、葉を与えたところ、病が癒えた。いま、道光三年二月上旬。今度は夫人の龍氏が病気になる、息子の側室である王紫瀟が香を焚いて、みずから身代わりになりたいと祈っている。

第十六齣 嫡病（正妻の病氣）

旦（莊淑姫、汪端）、小旦（紫瀟）

旦（莊淑姫）病に臥している。小旦（紫瀟）は寝ずの看病。葉や粥をのませたり、あんまをしたり。

下冊 香碗楼卷下

第十七齣 擒梟（賊を捕らえる）

浄（張鉄漢）、小生（雲楷）、副浄（飛天夜叉）

小生（雲楷）は、張鉄漢と協力して、私塩を扱う頭目である飛天夜叉と戦い、飛天夜叉を捕まえる。ここで立ち回りが演じられる。

第十七齣（正しくは十八） 叙勲（叙勲）

外（節相錢次公）

雲楷の功績を朝廷に報告する上奏文を書く。

第十九齣 聴雨（雨音を聴く）

小旦（紫瀟）

雲郎がいなくなつてから、太夫人（龍太君）の病氣は治つたものの、こんどは夫人（莊氏）が病氣になつた。紫瀟はずつとその世話をして、自分の身体が弱り、咯血した。

雨音を聞くにつけ、早く雲郎に帰つてほしい。夫人の病氣を知らせる手紙を書くが、自分の病氣のことは書かないことにする。

第二十齣 望月（月を望む）

小生（雲楷）

仕事につとめており、夫人や側室のもとに行けないことをいう。妻の病氣を伝える紫瀟からの手紙が届き、月を見てものを思う。

第二十一齣 覘占（巫女の占い）

丑（柳初新）、末（雲府大叔）、老旦（龍太君）、旦（莊氏）

老太太（龍氏）が、息子の側室が病気になるので、占ってほしいという。女巫の柳初新が占う。紫瀟の病気について、きわめて悪い卦が出たという。

第二十二齣 籤卜（おみくじ）

副淨（馮貴）

雲府の使用人である馮貴が、南京の閔帝廟で、紫瀟のために運命を占ってもらう。この一齣の会話は蘇州語である。

第二十三齣 帰舟（帰り船）

小旦（紫瀟）、旦（莊氏）、老旦（龍太君）

紫瀟が病気になったため、船で南京へ送られる。途中、雲檣の舟といっしょになり、二人は出会う。

第二十四齣 騎箕（死の知らせ）

末（奎宿星君）、雑（婁宿星君）、その他星の神、雷公電母。

天帝からの雨を降らせる命令を伝えられる。紫瀟がその日に死ぬ運命を暗示する。

第二十五齣 蘭殞（蘭の逝去）

貼（王氏瑞蘭）、小旦（紫瀟）

南京の王瑞蘭のもとへ、病んだ小旦（紫瀟）がかつぎこまれてくる。王瑞蘭が、紫瀟の髪と爪をきる（『香畹樓憶語』にあり）。雷公電母が登場し、雨と雷をもたらす。このとき紫瀟は息を引き取る。

第二十六齣 魂帰（魂の帰宅）

小旦（紫瀟）、副浄（黄巾力士）

黄巾力士が紫瀟の幽霊を捕まえるという。しかし、紫瀟は自分が死んでいることを知らない。力士は紫瀟の幽霊を見逃してやり、魂は蘇州の屋敷に帰ってくる。

第二十七齣 製襖（着物を作る）

四旦（雲氏萼仙）、五旦（雲氏苕仙）

蘇州の家では、まだ紫瀟が亡くなったことを知らず、紫瀟のために服を作つてやろうといっている。

第二十八齣 憑棺（棺に依る）

小生（雲楷）、貼（王瑞蘭）

雲楷が南京にやってくると、紫瀟はすでに亡くなっていた。王瑞蘭からその話を聞き、彼女の遺髪と爪を見て慟哭する。

第二十九齣 慈悼（慈悲深い追悼）

老旦（龍氏太君）

紫瀟が亡くなったことを知り、彼女を思い出して偲ぶ。

第三十齣 嫡傷（正妻の悲しみ）

旦（莊氏）

前の齣と同様、莊氏が彼女を悼む。

第三十一齣 選餞（餞別）

副浄（殷麗生の老僕）、小生（雲樞）、貼（家令）、生（殷麗生）、末（商二遊）、丑（桃花庵の囃雪）

殷麗生、商二遊が揚州の平山堂で、北京に行く雲郎を送別する。雲樞は、亡くなった紫瀟を悼んでいる。ここに、

新喪紫姫、恭奉太夫人寄来紫姫小伝、洋洋灑灑、将二千言、涙眼迷離、不忍卒読。

最近紫姫を失ったが、太夫人が「紫姫小伝」を送ってくださった。二千言あまりの大文章、涙にくれて心もぼんやり、しまいまで読み通すことができない。

とある。そして、戯曲に通じているという商二遊に、王紫瀟を題材にして戯曲を作るよう依頼する。

第三十二齣 仙召（仙界に召される）

小旦（紫瀟 仙人の衣装）、麻姑、弄玉、杜蘭香などの神々。

俗界に行っていた董双成が戻ってきたことの報告。（劇終）

『影梅庵』伝奇では、最後に董小宛が、西王母の命を承けて天上に迎え取られ、瑤池花史として仙界に昇ってゆくという結びになっていた。『香畹楼』伝奇では、最初の第一齣で、仙界の仙人が人間世界に降っていき、最後の第三十二齣で仙界に帰ってくるという枠組みの物語になっている。こうしたいわば神仙下凡の枠組みを持つ物語は、彈詞の『再生縁』、あるいは『紅樓夢』など少なくない。『香畹楼』伝奇は、この公式に従っている。

同じ彭劍南の『影梅庵』が、やはり冒襄と董小宛の愛情物語のほかに、明末の流賊張獻忠などに触れていたのと同様、『香畹楼』においても、陳裴之と王子蘭のこと以外に、陳裴之が長江の水利をめぐる活躍したこと、つまり、天下国家のために活躍する姿についてもかなりの篇幅を割いている。これも、『影梅庵』伝奇の場合と同様、やはりある意味、恋と政治への関心という二本柱といえよう。

『香畹楼憶語』について、幾人かの論者は、『影梅庵憶語』との比較の視点から論じている。朱劍芒「香畹楼憶語考」では、まずは『香畹楼憶語』が『影梅庵憶語』の後を承けた名著であることを指摘し、続いて錢塘陳氏の「一門風雅」について論じている。ここでは、すでに見たように、陳文述一家の成員が女性も含めて文学に通じていたことに触れ、次のように述べている。

王紫湘（王子蘭）がどれだけ賢孝であったとしても、小雲（陳裴之）の一個の侍妾に過ぎない。ところが彼女が一旦病没するや、小雲の『香畹樓憶語』はいうまでもなく、小雲の夫人や姉妹たちがそれぞれ哀詞を賦した。これについては、まだとりたてて奇とするに足りないともいえるのだが、奇特なのは、小雲の母親までが息子の妾のために、きわめて沈痛な伝を書いたことで、これはほんとうに前代未聞である。（中略）さらに、奇中の奇というべきは、頤道居士陳文述が、息子の妾のために「さめざめと涙を流して」、誄を作ったことである。礼教が打破されていなかったこの時代であって、こうした作品は、めったにないというばかりでなく、まったくのお笑いぐさであつたらう。

といている。こうしたことは、たしかに陳文述という人物の周辺であつたからこそ可能だったといえよう。

朱劍芒「香畹樓憶語考」は続けて、陳裴之と王子蘭（紫湘）との出会いと因縁について述べている。まずはそもそももの動機について、朱劍芒は、陳文述が病氣になった時にその平癒を祈願して「長齋」を誓った（長齋には夫婦の交わりを断つことも含まれたであろう）夫人の汪端が、夫の身の回りの世話のために側室を持つことを勧めた「賢恵」という視点から論じている。この点に関しては、康正果「悼亡和回憶——論清代憶語体散文的叙事」（台湾中央研究院中国文哲研究所「記伝、記遊与記事——明清叙事理論与叙事文学」国際學術研討会論文。またインターネット上の「康正果文集」でも公開）が、

『香畹樓憶語』からはっきり見てとれるように、多病であり、学問好きであつた女詩人汪端は、落ち着いて著

作ができる「自分の部屋」のために、夫の陳小雲が一日も早く妾を納れてくれることを待ち望んでいたのである。

と指摘するように、陳裴之が王子蘭を側室として迎えたことの背景には、妻の汪端が、いわば学業に専念するために、夫の世話を側室に委ねようとしたという、ある意味特別な背景もあったといえないこともない。

朱劍芒「香畹樓憶語考」はまた、王子蘭がそもそも陳裴之の作った詩を見て、その才能に魅力を感じた点、つまり、女性が男性の才能を評価し、側室になりたいとみずから願った点についても一言している。

続いて、陳裴之と冒襄を直接比較する。朱劍芒は、冒襄と董小宛に九年間の生活があったのに比し、陳裴之と王子蘭はわずか三年しかなかったことから、陳裴之の享受した艶福は、冒襄に及ばなかったという。また、冒襄が董小宛を娶るに際しては、数々の障害があった。それに対して、陳裴之が王子蘭を娶る際には、ほとんど何らの障害はなく、話はすんなり決まっていることを指摘している。

この二人の比較について、李彙群は『閨閣与画舫——清代嘉慶道光年間的江南文人和女性研究』（中国伝媒大学出版社 二〇〇九）の第五章「陳裴之的真情与幻情」の第三節「求文名之幻情」において、やはり両者のちがいに触れ、

もっとも明らかなのは、陳裴之が『香畹樓憶語』において、その紫湘（王子蘭）へのいちぢな思いを表現している点で、冒辟疆の董小宛に対する「上において下を見下ろす」視点とは完全にちがっている。

董小宛と冒辟疆の感情には、終始能動と受動、接受と施与の主従関係があった。言いかえれば、董小宛は冒氏の肺腑からの平等な愛を受けたことはないのである。

と述べている。

朱劍芒は次に、王子蘭の「賢孝」と「卓識」について論じている。王子蘭が陳家に来てから、陳裴之の夫人、また舅、姑、小姑たちの面倒をよく見、彼らから気に入られたことを記している。これについても、王秋雁「淺析『憶語』散文中的女性形象」（『新疆石油教育学院学报』第六卷第五期 二〇〇二年第一期）は、まずは王子蘭が、とりわけ大きな障害もなく陳家に嫁入ったこと、また陳裴之の比較的平等な愛を受けたことを挙げて、董小宛よりも幸運であったという。しかしながら、

まさしくそのようであったがために、紫姬（王子蘭）の人物形象は董小宛のように豊かなものではない。彼女の身の上には、われわれはより多く、封建大家族の中にあつて、老人の世話をし、正妻に氣を遣つて、家中の人々の好感をかちえた一人の賢惠な側室の人物形象を見るであらう。

といている。そして亡くなった時に家中の人々が彼女のために文章を書いたことは、たしかに当時にあつて特別なことではあつたが、

それは紫姬が彼女と小雲との幸福を犠牲にすることによって手に入れたものであつた。彼女はそのかよい肩にあまりに大きすぎる責任を引き受けていたのであり、内心の悲しみ苦しみは言葉に尽くしがたいものであつたろう。大きすぎる負い目が最後には彼女を押しつぶし、彼女の命の花を早くに散らさせることになつたのである。

として、王子蘭に同情を寄せている。

たしかに『影梅庵憶語』から百年の後に書かれた『香畹楼憶語』には、その百年の間の変化の相があらわれているといえるのかもしれない。

六、陳裴之の周辺

陳裴之とその家族についてはすでに見たが、ここでは『香畹楼憶語』の題詩、『影梅庵』『香畹楼』『両伝奇の題詩などを材料に、その周辺の人物の幾人かを取り上げてみたい。陳裴之の『香畹楼憶語』、また彭劍南の『影梅庵』『香畹楼』『両伝奇は、その時代と周囲の環境を背景にして生まれているからである。

孫原湘・席佩蘭

王子蘭が亡くなった時に詩を寄せている人に、孫原湘、席佩蘭の夫妻がある。この二人は、「夫婦能詩」として知られ、席佩蘭は、すでに述べたように袁枚の女弟子の一人である。ここでは、席佩蘭が『香畹楼憶語』に寄せて作った詩を見よう。「寄題小雲司馬香畹楼憶語後」である（この詩は席佩蘭の詩集である『長真閣集』には見えない）。

夫婿専城坐上頭 夫婿は専城にして上頭に坐し

双鬢清影共銀甌 双鬢 清影 銀甌を共にす

旧称才子如何遜

旧くより才子と称し何遜の如く

新得佳人字莫愁

新たに佳人を得 字は莫愁

小病偶還桃葉渡

小病 偶たま桃葉渡に還り

離魂先返稻香楼

離魂 先に稻香楼に返る

影梅前夢凄迷甚

影梅の前夢 凄迷なること甚し

忍捲湘簾月一鉤

忍びて湘簾を捲けば 月一鉤

専城は、一地方の長官をいう。何遜は、六朝齊梁間の詩人。八歳にして詩を善くしたという。ここでは陳裴之の早熟の才を指そう。桃葉渡は南京秦淮の地名。王子蘭が秦淮の出身であったからいう。莫愁はまた、六朝の齊のころ南京に生きた女性。稻香楼は、安徽の合肥にあった楼。龔鼎孳が、側室としたもと秦淮の妓女顧媚を郷里の合肥に連れて帰った時、この稻香楼に住ませたという。ちょっとした病氣を得たと思つて秦淮の故郷に戻ったところ、魂が身体を離れ、亡くなってしまったことをいう。そして、それを、やはり董小宛の死によつて終わる『影梅庵憶語』の物語になぞらえている。

最後に月が出るのは、『香畹楼憶語』に、王子蘭もまた月が好きだったとあるのを踏まえるであらう。

なお、やはり『香畹楼憶語』に「奉題朗玉弟湘煙小録即送入都 琴河女史 帰懋儀 佩珊」として詩を収めている
帰懋儀もまた、袁枚の随園女弟子の一人として知られる人である。⁽¹⁴⁾

于月卿・史靜

彭劍南の『影梅庵』『香畹樓』の両伝奇の題詞に詩を収めている人物に、陳文述の弟子である女性詩人、于月卿と史靜の二人がある。

于月卿の詩は、陳文述の『碧城仙館女弟子詩』に「于蕊生織素軒詩 名月卿 金壇人」としてあり、中に唐人の詩句を集めて作った「集唐題榫埵夫子影梅庵樂府」がある。

史靜は、同じく陳文述の『碧城仙館女弟子詩』に「史琴仙停琴佇月樓詩 名靜 溧陽人」とあり、この人は、彭劍南と同じ溧陽の人である。「題梅埵兄公影梅庵樂府」二首があり、その第一首は次のような詩である。

香畹樓中是後身 香畹樓中 是れ後身

影梅庵裏悟前因 影梅庵裏 前因を悟る

雲和笙和緜山月 雲和の笙と緜山の月と

相伴仙壇兩壁人 相伴ふ 仙壇兩壁の人

王子蘭は董小宛の後身ではないか。『影梅庵』の物語を見ると、董小宛が王子蘭の前身であることがよくわかる。雲和は、山の名。すぐれた楽器の材料を産する。緜山もまた山の名。『香畹樓』伝奇で雲榿（陳裴之）の前身とされる仙人王子喬が住んだ場所である。王子喬は笙の名手でもあった。この詩は『影梅庵』に題した詩であるが、香畹樓のことに触れているところから見て、彭劍南が『影梅庵』と『香畹樓』の両戯曲を作ったことを、踏まえるのである。

う。

陳文述の『碧城仙館女弟子詩』には、ほかにも許淑慧の「許定生琴外詩鈔 名淑慧 青浦人」に「題香畹樓遺稿」を収め、周綺の「周緑君双清仙館詩 名綺 昭文人」には、道光十五年（一八三五）の作とする「戲拈紅樓夢題十律」を収めている。「黛玉焚稿」など、曹雪芹の『紅樓夢』の場面を選んで詩にしている。

冒裏の『影梅庵憶語』は、『紅樓夢』の成立に一定の影響を与えたと考えられるが、『香畹樓憶語』の方は、『紅樓夢』より後の作品である。¹⁵『香畹樓憶語』でも、金沙の延陵女史が、亡くなった王子蘭のために贈った挽聯のことに触れたところで、

此与昭雲夫人篆書林靈卿葬花詩以当薤露者、可称双絶。

これと昭雲夫人が篆書で「林靈卿葬花詩」を書いて薤露（哀悼の歌詞）にしたものが、双絶といえた。

とあって、若くして世を去った林黛玉が作った「葬花の詩」による挽詩を贈ったものがあったことに、わずかながら『紅樓夢』との関係をうかがうことができる。夭折した美女、才女という一線で、『影梅庵憶語』の董小宛、『紅樓夢』の林黛玉、そして『香畹樓憶語』の王子蘭とつながってくるわけである。さらに陳裴之の周辺には、『紅樓夢』と深い関わりを持った人物があった。『紅樓夢図詠』の作者である改琦である。

改琦

改琦は、『香畹樓憶語』に詞を寄せている。「題朗玉兄香畹樓憶語後、調寄一夢紅、即送朗玉之江北 華亭 改琦七癖」である。

『香畹樓憶語』が書かれたのは、道光四年（一八二四）のことである。改琦は、かねてから陳文述、孫原湘、郭麐らと交際があった。何延喆『清代仕女画家 改琦評伝』（天津人民美術出版社 一九八八）の「改琦繫年」によれば、嘉慶十七年（一八一二）に、孫原湘が改琦の詞稿に跋を書いている（『玉壺山房詞選』巻下）。また、嘉慶十九年（一八一四）には常熟に行き、孫原湘とともに天龍庵に遊んでいる。この時には、郭麐もいっしょであった。また陳文述については、嘉慶二十年（一八一五）に「送玉壺山人遊洞庭西山」詩（『頤道堂詩』卷十三）があり、嘉慶二十二年（一八一七）に郭麐が改琦の仕女の図に題している（『靈芬館詩』四集卷十「題改七癖画仕女」）。道光元年（一八二一）には、郭麐が、『玉壺山房詞』の跋を書き、道光四年（一八二四）には改琦の「善天女図」に郭麐が題跋を書いている。¹⁶

改琦の『玉壺山人詩鈔』に影梅庵の詩がある。「題影梅庵図」二首である。その第一首は次のような詩である。

水絵蒼涼樹色昏 水絵の蒼涼 樹色昏し

疎香画出旧巢痕 疎香 画き出す旧巢痕

貼梅扇底粘花片 貼梅の扇底 花片を粘ずるも

難覓春人月下魂 覓め難し 春人月下の魂

この影梅庵の絵が改琦自身によって描かれたかどうかかわからないが、少なくとも、影梅庵の図があり、これはおそらく董小宛を描いた図であつたらう。

郭磨

『影梅庵』伝奇に、「朝天子 呉江郭 磨類迦」、「香畹楼憶語」に「題小雲夢玉詞後 呉江 郭磨 類迦」の詩詞を寄せている人物に郭磨がある。郭磨は、乾隆三十二年（一七六七）に生まれ、道光十一年（一八三一）に亡くなっている。字は祥伯、号は頰伽。『靈芬閣集』がある。艶詩をもって知られる。もと秀水の人、後、嘉善に住んだ。郭磨については、袁枚の『随園詩話』巻十二、巻十六、そして補遺巻三で言及され、「郭磨秀才」の詩句を引用している。同じく袁枚『続同人集』寄懷類に郭磨「寄懷随園先生」詩を収める。袁枚の弟子的存在であつた。すでに見たように、改琦とも交流があり、一つのサークルに属していたことがわかる。

陳玉蘭『清代嘉道時期江南寒士詩群与閨閣詩侶研究』（人民文学出版社 二〇〇四）は、清代嘉慶・道光時期の江南地方にあつて、科擧に及第して進士、举人になることができない「寒士」でありながら、詩名のあつた人々と女性詩人とを取り上げているが、その第十二章で郭磨について論じている。郭磨もまたこのいわゆる「江南寒士」である。この定義に従うならば、彭劍南、陳裴之もまた、「江南寒士」の類型に属し、またいずれも女性詩人たちと交遊があつたことになる。

東大総合図書館蔵の『靈芬館詞』には、この『香畹楼憶語』に題された詞は見えない。

結び

清代嘉慶・道光年間の人、彭劍南は『影梅庵』と『香畹樓』の両伝奇を作った。前者は冒襄の『影梅庵憶語』、後者は陳裴之の『香畹樓憶語』にもとづくものであつて、彭劍南は、清代の憶語体作品の二つを劇化していたことになる。これらの作品の主題を要約するならば、どちらも才能ある女性の贊美と、その若くして亡くなったことへの悲しみということになるうか。

彭劍南は、陳裴之の依頼によつて『香畹樓』を作った。この陳裴之は、袁枚と同じように、女詩人を弟子として持った陳文述の息子であり、その母親、姉妹、その妻など、その周辺の女性たちは、一様に詩文を作った才女たちであった。

さらに彭劍南や陳裴之の周辺には、袁枚の弟子であつた席佩蘭、『紅樓夢図詠』を描いた画家の改琦、詩人の郭麐などの人間関係があつた。

『影梅庵』が作られた背景には、一つには当時の明末清初へのノスタルジーがあつたであろうし、また『影梅庵』『香畹樓』が作られたのは、才女たち、とりわけ薄命の才女たちを高く評価し、同情を寄せる時代の背景があつたこともまちがいない。

なお、陳文述は日本でも知られ、その詩集が幕末に刊行されている。当時には、例えば頼山陽における江馬細香などのように、漢詩人が女弟子を持つ風潮も生まれている。また、森春濤が編んだ『清三家絶句』は、陳文述、郭麐、

張問陶の三人を取り上げており、日本の明治期の文学に影響を与えている。さらに、森春濤の息子である森槐南が、『補春天伝奇』を作っているが、これは陳文述を主人公とする戯曲である。

清代嘉慶・道光期の文学は、日本の文学にも深く影を投げかけているのであるが、その問題は、また別に取り上げることにはしたい。

- 1 冒襄と『影梅庵憶語』については、拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』（東京大学東洋文化研究所報告 汲古書院刊 二〇一〇）を参照のこと。
- 2 これらの諸点については、前掲拙著第二部第五章「冒襄、『影梅庵憶語』と『紅樓夢』」で論じた。
- 3 『影梅庵』伝奇下冊に収める諸氏の「題詞」のうち、姚長煦の詩に「読君半部傷心史、可抵当年蜀碧来（君が半部の傷心の史を読めば、当年の蜀碧に抵て来るべし）」とあり、「蜀碧四卷、彭遵泗作」との自注がある。彭遵泗は四川眉州の人であって、同じ彭氏ではあっても、彭劍南との直接の関係はないようである。
- 4 阮大鍼の『燕子箋』をめぐる事件については、拙著第一部第四章「冒襄の演劇活動」を参照のこと。
- 5 Ellen Widmer, Introduction, Ellen Widmer and Kang-i Sun Chang ed. *Writing Women in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1997, p.6. より詳しくは、同氏の論文 'Xiaoping's Literary Legacy and the Place of the Woman Writer in Late Imperial China', *Late Imperial China* 13.1:111-155.
- 6 十九世紀における明末ノスタルジア現象については、Anne Gerritsen, 'Searching for gentility: the nineteenth-century fashion for the late Ming', Daria Berg and Chloe Starr ed., *The Quest for Gentility in China: Negotiations beyond gender and class*, London and New York: Routledge, 2007, 188-207 を詳しく論じている。

- 7 現在『白門柳』の戯曲は、そのテキストを見ることができないようである。彭劍南は見えていたのであろうか。なお、張宏生・馮乾『白門柳——龔顧情緣与明清之際的詞風演進』（《中国社会科学》二〇〇一年第三期）によれば、『白門柳』は戯曲ではなく、詞の集だとのことである。『全清詞 順康卷』（中華書局 二〇〇二）第二冊「龔鼎孳」に収める。
- 8 光緒『溧陽県統志』卷八選舉志 舉人に「史載熙 原名載颺、字默齋、同丁卯 国史館議叙知県、見旧志、後歷任福建平和建安知県」とあり、嘉慶『溧陽県志』卷十選舉志 舉人 嘉慶に「史載颺、祐子。丁卯順天 国史館議叙知県」とある。父の史祐については、同書卷十選舉志 進士 嘉慶に「史祐 字受謙 同丙辰（嘉慶元年 一七九六）、歴官戸部山東司主事、陞員外郎中、擢御史巡視通漕、転兵科給事中、現補戸部広通司郎中」とある。また、光緒『溧陽県統志』卷十五藝文志 集部に「覆瓶集 二卷 史載熙撰」とある。『覆瓶詩鈔』と題する道光五年刊の五巻本が現存するようである。
- 9 道光『休寧県志』卷九選舉 舉人 嘉慶十五年庚午科に孫如金の名が見える。
- 10 合山究「陳文述の文学と逸事と女弟子」（もと『文学論輯』第三十三号 一九八七、同氏『明清時代の女性と文学』汲古書院 二〇〇六にも収む）。陳文述については、梁乙真『清代婦女文学史』一九二五、また劉靖淵「陳文述論」（《山東師範大学学报（人文社会科学版）》二〇〇三年第四十八卷第三期）ほかもある。
- 11 捧花生が、車持謙という人物であることは、塗元済『閩中憶語』（上海文藝出版社 二〇〇六）に収める『香畹樓憶語』の注が指摘し、さらに李彙群『閩閩与画舫 清代嘉慶道光年間的江南文人和女性研究』（中国伝媒大学出版社 二〇〇九）の第四章「車持謙及其『画舫』系列」で詳しく論じられている。
- 12 汪端については、鍾慧玲「呉藻与清代女作家的交遊—張襄、汪端」（張宏生・張雁編『古代女詩人研究』湖北教育出版社 二〇〇二所収。初出は『王夢鷗教授九秩寿慶論文集』国立政治大学中文系 一九九六）、駱育萱「清代女詩人汪端及其『明三千家詩選』之詩観」（《南台科技大学学报》第三十四卷第二期 二〇〇九）がある。
- 13 席佩蘭については、蕭燕婉「閩秀詩人席佩蘭の文学—「夫婦能詩」を中心に—」（蕭燕婉『清代の女性詩人たち—袁枚の女

弟子点描―』中国書店 二〇〇七所収。初出は、九州大学中国文学会『中国文学論集』第二十八号 一九九九年がある。

14 婦懋儀についても、蕭燕婉「閨塾師としての婦懋儀の生涯と文学」（蕭燕婉『清代の女性詩人たち―袁枚の女弟子点描―』中国書店 二〇〇七所収。初出は「袁枚の女弟子婦懋儀の生涯と文学」九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十四号 二〇〇五）がある。

15 拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』（東京大学東洋文化研究所報告 汲古書院 二〇〇九年）第二部第五章『冒襄、『影梅庵憶語』と『紅樓夢』を参照。また、李彙群「亦是『紅樓』の個中人―『紅樓夢』与清代的『画舫』筆記」（『紅樓夢学刊』二〇〇八年第二期）は、『紅樓夢』とこの時期の色町の記録である「画舫筆記」との関係につき、例えば、当時の色町で『紅樓夢』が読まれていたこと、また両者に共通する「種情人」の性格などについて、詳しく考察している。陳裴之は、それらの一つ『秦淮画舫録』の序を書いている。

16 改琦については、神田喜一郎「玉壺山人の生涯―清朝第一の美人画家―」（『中国における詩と美術の間』『神田喜一郎全集 第五卷』同朋社出版 一九九三年）があり、そこでも孫原湘のことに触れている。また、新井洋子「改琦の詩―玉壺山人詩鈔』について―」（『東方学』第九十九輯 二〇〇〇）は改琦の詩について論ずる。今回、何延喆『清代仕女画家 改琦評伝』（天津人民美術出版社 一九八八年）は、新井洋子氏よりお貸しいただいた、見ることができた。また同氏から『玉壺山人詩鈔』のコピーをお送りいただいた。記して感謝したい。

17 新井洋子「森春壽『清三家絶句』について」（『二松』第十九集 二〇〇五年）がある。

